

第一次グローバル時代における自己組織的なネットワーク

——日本におけるイエズス会士——

アメリカ・ポロニア（ポルト大学）
薩摩 真 介 訳

一 理論的枠組み 帝国建設に関する新たな理論

ヨーロッパの歴史学の研究史は、通例、近世（一五〇〇～一八〇〇年）におけるグローバリゼーションの分析を、「帝国建設」の過程と結びつけてとらえている。そのような研究は、ポルトガル人、スペイン人、オランダ人、イギリス人、そしてフランス人主導の海外への拡張主義を、その過程における主要な梃子とみなしており、ヨーロッパ人到来のずっと前からインド洋で増しつづけたグローバル化以前のダイナミズムを肯定的に論じるような諸々の提案を軽視しているのである。

さらに、近世の諸帝国がもたらした歴史的結果に関する研究は、通常、中央権力の戦略や諸帝国間の角逐、独占、軍事戦略、および植民者間の政治抗争に焦点をあてている。このような視座は主として「以下のような」三つの結果をもたらしている。

一 それらの研究は、中央権力の戦略に焦点を当てることで、個人や個人からなる諸集団が、いかにしてそれらの歴史的ダイナミクス「の生成」に、時には中央権力自体の貢献を凌駕するほどの貢献をなしたかを見えにくくしてしまっている。

二 ネットワーク「研究」に基づく数少ない既存の分析は、それが政治的なものであれ、宗教的なものであれ、あるいは経済的なものであれ、もっぱら制度化された公的な結びつきをとり扱っており、非公式かつ制度化されていない領域で活動していた人々を除外している。

三 それらの研究は、アフリカ、アジア、アメリカにおいて「ヨーロッパ人が」接触したエージェント「行為主体／仲介者」や社会、そして諸文明の活発な影響を軽視しており、植民地のダイナミクスへの現地「の人々」の関与を無視している。

アジア、とくにインド洋に関しては、関連するいくつかの研究は、すでにこのような認識を超えてさらに先へと進んでいる「といえる」かもしれない。われわれはそのような研究として、サンジェイ・スブラマニヤンや、マイケル・ピアソン^③、あるいはジェイムズ・ボヤジアン^④の著作を挙げることができよう。しかし、たとえそうであっても、なされるべきことはまだ多く残っている。実際、そのような視座^⑤に対して、近年ではヨーロッパと非ヨーロッパ地域双方における活発な歴史研究のレンズを通して検討がなされている。第一次グローバル時代において、海外でのヨーロッパの支配権がうち立てられた非公式のやり方を表わすために、「非公式帝国」という言い方さえ登場している

のである。⁶⁾

また同時に、「いまでは」ネットワークが中心的な概念となり、ネットワーク復元法が近世のグローバル化の分析における中心的手続きとなった。研究者たちの関心は、その性質上、ナショナルで、協力よりも対立を煽るような中央権力の戦略が実施された結果生じる「公的な」ネットワークよりも、むしろ、公的ネットワークにとどまらない、非公式で帝国の枠を超えた境界横断的なネットワークの方へと向けられている。この理由は明らかであり、それはグラスゴーでの二〇一二年四月の ESHC「欧州社会科学歴史学会」へのパネル・プロポーザルからも確認しうる。それによれば、「次のような」合意がますます形成されつつある「という」。「すなわち」「ヨーロッパの海外の諸帝国の大半は利益の多い成功したものであったが、それは、彼らの奉仕する社会的経済的ネットワークの公共善のために働いていた諸個人や諸個人からなる諸集団の関与のおかげであった。自己組織的で、帝国や文化の垣根を越えるこれらのネットワークは、たいていは国家や教会、そして独占的機構に深刻な挑戦を突きつけるものであった。なぜならばそれらは、世界規模で行なわれていた違法で禁じられていた取引の大半の源泉であると同時に、それらの機構の内部にあって、あるいはそのような機構と協力しつつ、実際に帝国建設のエージェントになったからである」。⁷⁾

本稿は、歴史研究を次第に修正しつつあるこのような傾向と歩を同じくするものである。その基調を形作ったのは、フランチェスカ・トリヴェッラートの『異邦人の親密性』⁸⁾や、ストウドニツキーの著作である『ポルトガルの大西洋におけるディアスポラ』⁹⁾、あるいは、ラミキスのスペイン人商人と海外ネットワークについての研究である¹⁰⁾。

われわれの研究はまた、近年の歴史研究において採用されているや

り方を踏襲するものでもある。これは歴史学に応用された、協力についての理論から着想を得たものであり、欧州科学財団の TEECT（協力と貿易の発展）プログラムに提出された、国際的かつ学際的な研究プロジェクトである DynCoopNet によって現在発展させられているものである。理論的背景に関しては、この DynCoopNet（正式名称は「第一次グローバル時代における協力に基づく自己組織的商業ネットワークの動的複雑性」¹¹⁾）は、協力についての発展的モデルと理論を歴史研究に応用している。方法的観点から見ると、それはネットワーク分析とエージェントを基盤としたモデル化という、基本原則に基づくものである。

このプロジェクトは、世界経済は十五世紀から十八世紀の時期に、国境や大陸を超えた広範囲の協力関係によって次第に特徴づけられていったと主張する。さらにこのプロジェクトは、「そのような変化は」グローバルなコミュニケーションのための新たな手段によって、そして、公式なネットワークだけでなく、しばしば多国籍的でもあった非公式のネットワークの構築によって可能になったと論じる。

このプロジェクトの主要な前提のうち、いくつかを取り上げてみよう。

1. 協力は、いくつかの自己組織的なネットワークを結びつけた。
2. 世界経済はこの時期に、ダイナミックで開放的、複雑で非直線的なシステムとなった。
3. この世界のいかなる地域の歴史も、それが他の場所、そしてシステム全体とどのようにして結びついていたかを調べることなしには理解しえない。¹²⁾

これらの結びつきは、グローバルなレベルでは、それが独占貿易会社であれ、国家機構や国家の代理人であれ、公式のエージェントが行

なう帝国建設のための公的活動よりも、むしろ非公式で自己組織的なネットワークの仲介によって主に維持されていたのであった。

DynCoopNetによれば、協力に基づく自己組織的ネットワークは、権力の分散によって特徴づけられるという。協力に基づくこれらのネットワークは、商品や情報、資金のフローの中断に柔軟に対応する上で必要となる創造性やイノベーションの源泉として役立った。協力的な行動の中には、重要な差異があり、それら「の差異」は、文化的情報や諸機構、そして個々のエージェントによって形作られたものであった。これら「の要因」は各場所に固有のものであり、また政治的、商業的、社会的ネットワークによって用いられる回路に応じて変化しえたのだった。⁽¹³⁾

様々な時間的尺度における自己組織的な商業ネットワークの仲介を明らかにしようとするこの研究プログラムの戦略と作業計画は、個人に注目するという新たな観点を通じて、世界規模のダイナミクスを再評価するための主要なツールとして提示されている。しかし、協力のメカニズムを十分に理解するには、協力が生じたのは諸個人の間、あるいは非公式のネットワークの間だけではないという事実を認識することも重要である。個々のアクターや非公式のネットワークは、公的権力や王権、あるいは国家に対して、常に逆らって行動していたというわけではない。諸個人と国家の間の協力は、帝国建設においては、しばしば決定的「に重要」な手段だったのである。「この点に関する」われわれの見解は、つまるところヨーロッパの諸帝国の建設における近代国家の役割は否定したい、というものである。海外帝国の体制は、行政上の統制や軍事組織の面で、個人や孤立した集団には得がたい複雑なロジスティクスと相当な規模の財政力を必要とした。しかし「同時に」、中央権力によって創出され、調整されていたその複雑な

システムは、しばしば諸個人からの協力の依存していたのであった。

このように、自己組織的ネットワークに基づくグローバルな相互作用の構築「という現象」は、政治的、宗教的、経済的な境界を超えたダイナミクスを理解する上で「いまや」不可欠のものとなっている。そしてそれは実際、グローバル化の過程を持続させているものなのである。さらにいうならば、個人や国家間の協力的振る舞いは、欺きや逃亡といった報復的行動を除外するものでもなかった。協力のメカニズムを理解するということは、協力のあり方はポジティブな貢献からネガティブな貢献まで、積極的な協力から単なる共同作業まで、対話からごまかし、逃亡、積極的な競争まで——この最後のものはしばしば協力とは正反対のものとみなされているが——にまで及ぶ、異なる程度の関与を含むものであるとの認識をも伴うのである。

協力についての理論家によれば、協力とは、「他の個人に利益をもたらし、受け手へのその有益な効果ゆえに選択される振る舞い」と表現しうるといふ。⁽¹⁴⁾ 経済学者の協力の定義は二つの根本的特徴に注目したものである。一つ目は、協力を、参加者にとって利益のあるような、あるタスクを分担する諸個人の集合的行動とするものである。⁽¹⁵⁾ もう一つは、協力を、諸個人や諸集団、諸組織が共通の目標を達成するために一致して行動する社会的プロセスとみなすものである。このような意味での経済学的アプローチは、(コスト対利益といった)協力関係の経済的特徴だけでなく、協力相手や彼らとの関係の社会的属性にも注目する。⁽¹⁶⁾ この「協力という」振る舞いは、諸個人間の集合的ないし双務的な相互作用を伴う目標や期待、そして動機づけによって駆り立てられる。⁽¹⁷⁾ たとえ確立されたゲームが避けがたい社会的含意を有しているとしても、協力の基盤となるのは、「あくまで」個々人の動機や信念なのである。

これらの仮定を支えている証拠を議論するために、われわれはポルトガルの事例に焦点を当てる。「その際には」まず全体のレベルを見たのち、次に日本におけるイエズス会士の振る舞いと、彼らと太平洋における交易ネットワークとの間の相互作用に焦点を当てたミクロなアプローチを通じて検討する。

二 ポルトガルの海外居留地の建設における 国家と個人の役割

すべての海洋と大陸を巻き込む最初のグローバルな経路が、ポルトガル人やスペイン人のおかげで利用可能になったということは否定しがたい。なぜならヨーロッパの文脈では、ポルトガル人が、この動きを開始し、世界規模でのグローバルな交換を可能にした恒常的な海路を創出した、最初の人々であるということは否定できないからである。

ポルトガルの「活動の」世界中への拡張についての証拠や傾向はよく知られているところである。むしろ、あまり知られてないのは、その理由である。すなわち、小さな辺境の国の離陸や達成を説明できるような根拠、「ポルトガルが」植民地のダイナミクスの樹立と、その長期にわたる維持の双方において主導的な地位につくことを可能にした、その根拠である。果たして「ポルトガル」国家の政策が、それらすべての答えになりうるのだろうか。

研究史上ある程度の合意をもって、次のような想定がなされている。海外拡張に乗り出したのはポルトガルの王権である、と。しかし、これは本当に事実なのであるか。たとえば、ポルトガルでの歴史研究においてポルトガル拡張の第一歩とされている一四一五年のセ

ウタ征服は、確かにジョアン一世の主導でなされたものである。しかし、今日ではこのエピソードは、ポルトガルの名立たる歴史家たちによって、近代の地理的拡張の第一歩というよりも、むしろ、キリスト教のイベリア半島再征服運動の過程の最後のエピソードとみなされている。そして「このセウタ征服は」疑いもなく、財政力、軍事力、海軍力をその作戦のために用いることを強いられた個人のエージェンツの貢献に依存していたのであった。¹⁸⁾

また、地理的発見や海運、植民地への定住のいくつかのプロセスは、実際にはポルトガル王権の中心的人物、すなわち、いわゆる「航海者」と呼ばれているエンリケ王子が主導したものではなかったということも証明されている。それらはむしろ、のちに中央権力の戦略に統合されることになる個人主導「の事業」と偶然的達成の、相乗効果の結果生じたものだったのである。ポルトガル王権は当初から、植民地空間における司法機構のモデルの面で、居留地、軍事防衛、そして貿易問題に関する権限が委譲されていた私人にしばしば依存していた。まず「ポルトガル領の」大西洋諸島において、そしてのちにはブラジルで施行された世襲のカピタニア制のモデルは、その証左である。

一五四二年からのブラジルにおける総督府の設立や、それより前のエスタード・ダ・インディア（ポルトガル領インディア）¹⁹⁾創出の例のように、国家が海外領土の行政機構の政治的集権化を目指した時でさえ、これらの諸機構は私的団体の非公式の関与を、排除あるいは回避することは決してできなかったということが明らかにになっている。

構築された行政上のモデルは、独占的な香辛料貿易の制度と、東洋へと旅するすべてのエージェンツ——それが役人であれ、軍人であれ、冒険家であれ、あるいは修道会の一員であれ——の、中央による

効率的な統制を目的としていた。それは東洋から極東の間で生ずるあらゆる過程に対する統制を国家に供するはずであった。しかしそのようなことは実際には起こらなかった。ルイス・フェリペ・レイス・トマースによるポルトガル領インドシアの定義は、東洋におけるポルトガル人のプレゼンスは、ポルトガル領インドシア政府の統制をはるかに超えるものであったという考えをはつきりと示している。著者「トマース」はこう述べる。「十六世紀におけるポルトガル領インドシアは、明確に定義された地理的空間を表しているのではない。むしろそれは、インド洋や近隣の海域、喜望峰から日本に至るまでの沿岸部の領地において、ポルトガル王権によって管理、運営され統治されていた領土、制度、資産、諸個人や利害の集合体を指すものである」¹⁹。

一般的な用語としては、この概念は王権によって公的に統治されていた諸利害を指すのであるが、それは「インド洋におけるポルトガルの拡張」という、より広い概念とも一致しないし、またそれを言い尽くすものでもない。この「後者の」概念は国家とは無関係に、そして時にはそれに逆らってすら発展した、非公式な様態の居留地をも包含するものである。

同じ著者は、「下位植民地化」現象の重要性も強調している。これはすなわち、主要な植民地からの「別の」植民地の創出であって、「新たにできたその植民地は、」行政面であれ経済面であれ、中央権力のコントロールを逃れていたのであった。これらの「新たな」植民地はインド洋の各地で増殖した。それは、たとえば、(タイ南部の)パタニヤ、ネガパトナム、(インド南東部の)コ罗曼デル海岸の)マイラプールのサンクトメ、そしてとりわけ、マカオのような場所においてであった。

日本に関しては、周知のとおり王権も副王も、「日本の」領内にお

けるポルトガル人のプレゼンスの拡張と地位の強化にはいかなる役割も果たさなかった。それは、彼らがその過程の最終的な結果に干渉しなかったのと同様であった。「すなわち、」この過程は最終的には、一六四四年の宣教団追放の布告に続く、一六三九年のポルトガル人の日本からの追放につながったのである。²⁰ポルトガル王権はイエズス会士に全権を委譲しており、成功裏に、あるいは不成功に終わったポルトガルの対日関係が成し遂げたものは、宗教面であれ政治面であれ、文化面であれ商業面であれ、主として彼らに依存していたのであった。

二——東洋におけるポルトガル人 ——個人と非公式のネットワークの役割

ヨーロッパ、とくにポルトガルと、東洋および極東の間で、接触や相互交流をもち得るか否かは、実際のところ、それらの世界をつなぐ公式・非公式のネットワークの恒常的な働きに依存していた。東洋におけるポルトガルの公的で制度的なネットワークのうち、第一に、ポルトガル領インドシア政府を代表するすべての行政的、財政的、軍事的組織があった。それには副王から判事、書記、執行吏、船長、そして徴税人あるいは公証人に至るまでの幅広い官吏が含まれていた。フランシスコ会士やイエズス会士、ドミニコ会士、さらにはベネディクト会士、そしての中にはアウグスティノ会士の宣教活動によって提供された制度的枠組みも忘れてはならない。²¹それらの組織は、海外領土に創設された司教区組織によって維持された教会ネットワークとともに——両者は、ポルトガル王権によって統治される東洋でのポルトガルの布教保護権に統合されたのだが——情報やモノの流通をすべて提供したのである。

ポルトガル「本国」の同様のモデルをまねていた「国外の」自治体

もまた、海外でのポルトガル人のプレゼンスの組織化に寄与した構造的ネットワークにおける他の結節点となっていた。最後に、しかし重要性がもつとも低いというわけでは決してないのだが、ポルトガルの植民地居留地に存在した慈善院^{ミゼリコルディア}によって提供された枠組みも考慮されるべきであろう。⁽²²⁾これらは、その本国において対応する組織を再現した世俗の慈善団体であった。これらの組織はポルトガル人居留者やその子孫に宗教的および社会的援助を提供したのみならず、ニュースやモノ、カネを移送する手段をも提供したのであった。

公的で制度化されたネットワークを提供するこの枠組みに加えて、エージェント間の個人的コネクションもまた考慮されるべきである。王権が「その臣民による」リスボンから東洋への出立を、詳細な記録を付けることで統制しようとしていたのは確かである。王権によって認可された個人のみが、インディアへと旅する資格があった。法律はさらに、アジアにおける合法的居住者として三つのカテゴリーのみを認めることで、ヨーロッパ人の居住者を制限した。「そのカテゴリーとはすなわち、」兵士、カザードス（既婚の男性で、一六〇〇年ごろには約二千人いたと推測されている）、⁽²³⁾そして司祭や宣教師を含む聖職者である。加えて、法律はあるグループにはさらなる制限を課していた。それは、すべての外国人、およびキリスト教に強制的に改宗させられた元ユダヤ人の子孫たるポルトガルの新キリスト教徒を含む、非正統的信仰を有する疑いのある人物を、アジアから締め出したのであった。また、女性も東洋へと旅することを固く禁じられていた。

しかし現実には、法律で規定されていたところからはほど遠かった。ユダヤ人と新キリスト教徒に関しては、東洋、とくにゴアにおける彼らの存在は、十六世紀の最初の数十年以降、記録によく留められている。新キリスト教徒のインディアへの非合法的移住の流れに関する最

初の知られている言及は一五一九年から存在したが、この現象はそういった移住を統制するための王権による法律の公布につながった。⁽²⁴⁾このような流入は、一五三〇年代以降増加する傾向にあり、入手しうる文書は「そのような」移民の地理的拡散を裏付けている。その目的は、ゴア、コーチン、ホルムズ、また、カンベイ、バセイン「パティン」、チャウル、コモリン岬、マイラプールのサンクトメ、ベンガル、ペグー、テナセリム、マラッカ、タイ、モルッカ諸島、そして日本や中国にまで及んでいた。⁽²⁵⁾

彼らの数や権力、影響力、とくに商業界におけるそれは、ジェロニモ・ディアス博士の手になる、ゴアからの国王宛ての一五三九年の書簡によって裏付けられる。その中で彼はこう記している。「彼らは当地において、この都市や陛下の他の居留地や城塞に少なからぬ数存在し、きわめて有害であります。それらの者のうち、当地にいるものは、あらゆる種類の契約や貿易、および他の活動に関与しております。なぜならば、すべてが彼らの手中にあるからです。（中略）これらすべてのカラック船は、認可を受けないそれら密航者を満載してやってきます。われわれは陛下がこのことにお気づきであるうとは思いません。なぜならば彼らは皆を贈り物や金で買収して、これらの件に関して陛下によって課されていたであろう規制をすり抜けてしまうからです」⁽²⁶⁾

同様のことは女性についてもいえる。海外へと出発したこれらの女性のうちで、国王の命のもとで出発した者——あるいは国王に迫り立てられて出立した者すらいたのだが——「そのような者たちと」、非合法にこっそりと出発した者たちとを明確に区別する必要がある。実際、主にインディアへと行く船に乗り込んだ女性——それらの船からわれわれはより多くの情報を得ているのであるが——は、世俗および

宗教上の双方の有罪判決の標的とされていた「者たちであった」。「女性の渡航に関する」法的制約は、一五二四年のヴァスコ・ダ・ガマの決議からも明らかである。それによれば、国王の許可をもたずに船上で発見された女性は、公開の場で鞭打たれ、アフリカの獵場の一つへと追放されることになっていた。たとえ彼女が既婚者であってもそうであった。この場合、夫は手枷足枷がはめられ、ポルトガルに強制送還された。また「女性を乗せていたその」船の船長で、それらの人々を当局に引き渡さなかった者やその共犯者は、給与を失うことになっていた。²⁷⁾

この規制はその対象、とりわけ、いわゆる「疑わしき女」についても言及している。「すなわち」、貞操に欠け、イエズス会士の通信文の中では船上における畜妾の慣行と結びつけられ、船上での秩序の乱れや治安の悪化、不品行、規律の欠如に責任があるとされ、そしてそういうものとして処罰の対象になっていた者たちである。このような理解に基づいて、彼女らは可能であれば旅の途上の寄港地で陸にあげられた。一五六二年の手紙において、セバステイアン・ゴンサルヴェス神父は「次のように」説明している。「最初の日に、われわれはしばしば悪魔が水夫たちの破壊をもくろんで導きいれる毒を外に出そうとした。よってわれわれは二人の疑わしき女を追い出したのである」。²⁸⁾

インディアに赴く旅の途上でのジョアン・バプティスタ・ダ・リベイラ神父の陳述も、このような文脈の中で理解されるべきである。

「他の三人の女は、一家の稼ぎ手となる夫もなく、またいかなる良きものもなしに船上にいた。そのうちの一人は男の服を着ていた。(中略)われわれは彼女らを、施錠をして投獄した。この目的のために彼女らに分厚い箱を作ったのである。それでわれわれはそれを用いたのだが、その鍵は信心深く神を畏れる人物に与えた。(中略)特定の時

間には彼女らに食べるものを与え、用を足すために箱を開けてやつた」。²⁹⁾

彼女らが異なる航海において、どのくらいの割合で船上にいたのかを正確に推し量ることはできない。それは史料がないからでもあるし、また、ほとんどの場合、彼女らの存在が違法であり変装を伴っていたがゆえに、記録に留められることが通常少なかったからでもある。しかし、船上における女性の存在は、少数ではあっただろうし、例外的かつ非生産的とみなされていたであろうが、常にあったと信ずることは許されよう。彼女らの海外への渡航「という事実」があったからこそ、彼女たちの植民者としての活動がありえたのである。

王権の認可を受けた者に加え、許可を受けない個人も、このようにしてその性質上コスモポリタンである東洋世界へと入っていった。そしてポルトガル当局は、このような流入をほとんど統制することができなかったのである。彼ら彼女らは、しばしば現地の人々や貿易の代理人との積極的な協力関係に頼りつつ、個人で、あるいは非公式のネットワークの中で行動した。われわれはこのグループの中に「ランサードス」(アジア中に散らばっていたためこう呼ばれていた)を含むことができれば。これは自由に貿易するために、ポルトガルが統制している居留地を離れた人々、あるいは傭兵となった者、もしくは近隣のムスリム諸国家に仕える背教者の傭兵や私掠者^{ゴルセア}となった者たちである。アンソニー・ディズニーの推計によれば、十七世紀初頭において、マラバル海岸からベンガルまでの現地の諸侯は、五千人にもおよび「ランサードス」を雇っていたという。³⁰⁾

これは、新たな機会を求めて大きな利益を得るために危険や未知の土地へと向かっていく、著しく流動的な人々であった。彼らは、「ポルトガル人」東洋における活発なプレゼンスを確立する上で、大い

に積極的な役割を果たした。また彼らは実際、ポルトガル人にはそう知られていた、東洋世界における最後のフロンティアとの、ポルトガル人による最初の接触の幾例かにも貢献したのであった。そのうちの一人である、商人で兵士、海賊で冒険家でもあったフェルナン・メンデス・ピントは、日本との最初の接触に寄与したとされている^③。それは、同様の経歴をもつジョルジュ・アルヴァレスが、中国や香港に到達した最初のポルトガル人探検家とされているのと同様である。このように彼らは、ポルトガル帝国の衰退を超えて持続したアジアにおけるポルトガル人の永続的「なプレゼンス」に寄与したのと同様に、「東洋との」最初の接触においても活動的なエージェントとして立ち現れるのである。

同時に、東洋におけるポルトガル領の没落は、アジアの領主たちの勢力均衡や経済的優先順位といったものを含む現地の文脈の展開の結果と同じ程度に、他のヨーロッパ諸国との激しい競争の結果であると認識することも重要である。「しかし、」実際のところは、新たなヨーロッパのプレイヤーによる干渉は、ポルトガル人のプレゼンスと行動に対する、現地領主たちの強い反発を生み出す触媒以上のものではなかった。オランダ人、フランス人、そしてイギリス人は、サファヴィー朝のシャーやタンジャーヴールやマドウライのナーヤーカ朝の王たちがそうであったのと同じ程度に、あるいは日本で豊臣秀吉や徳川家康の政策がそうであったのと同じ程度に、ポルトガル領インディアの失敗にとって重要であった。同様に、オランダ人によるマラッカやセイロン、克蘭ガノール、ネガパトナム、コーチン、クーラン「コッラム」、そしてカナノールの奪取は、ポルトガル領インディアの撤退にとっては、一六二二年のシャー・アッバース「サファヴィー朝のアッバース一世」へのオルムズの喪失や、「現在のミャンマーに

あった」シリアム（一六二二年）、フーグリ（一六三二年）、あるいはカナラ諸港（一六五四年）の喪失、あるいは、同様に一六三九年の長崎の喪失と日本からのポルトガル人の追放ほどには決定的な要因ではなかったのである。

加えて、東洋や極東におけるポルトガル王権の領地の喪失は、ポルトガル人エージェントの側での主導的役割の同等の喪失に対応していたというわけではなかった。彼らのプレゼンスは、マラバル海岸やベングアル湾、そして極東において、いまだ力強く回復力のあるものであった。ポルトガル人は、オランダ人へのネガパトナムの喪失を切り抜けるべく、コロマンデル海岸でのプレゼンスを十七世紀の間にポルト・ノーヴォ（新港）において回復した。一六六〇年にポルトガル人のプレゼンスが再び確認されているフーグリにおいてと同様、マイラプールのサンクトメにおいても、居留地の喪失後、ポルトガル人コミュニティは正式に再結集した。同様のパターンは、たとえばタイのアユッタヤにおいても再現されたようである。ここでは、オランダ人、イギリス人、フランス人が代わる代わる支配的なプレゼンスを有したにも関わらず、一六八四年には組織化された「ポルトガル人」コミュニティがいまだ存在し、そのプレゼンスを維持し、またイエズス会の聖職者による司牧を保っていたのであった。

オランダ東インド会社の行政官の一人の手になる、ネーデルラント連邦共和国の支配者たち宛てのセイロン奪取に関する一六五八年の陳述書は、このような「ポルトガル人コミュニティの」回復力に対する、オランダ人の認識を次のように要約している。「ますます多くの者たちが、『元の故郷である』ポルトガルについてはもはや考えず、インディアを故郷とみなすようになっていきます。それらの人々は、かの地『ポルトガル』とはほとんど、あるいはまったく貿易をせずに、

インディアの富によって生活し豊かになっているのです。あたかも彼らはインディアの土着の人々であり、他の故郷を知らぬとでもいうかのようにです」³³。

このことは、『エデンの薫り』の著者であるチャールズ・コーンにとつても、コメントに値するものであった。「香料諸島」「モルッカ諸島」から追放され、その独占をオランダ人に奪われたにもかかわらず、ポルトガル人はアジア中に固まって散らばっている。(中略)ポルトガル人は(中略)、彼らがその中に地歩を築いているアジアの人々の社会的・文化的・生活の中に深く入り込む能力という点では、極東におけるヨーロッパ人植民者の間でユニークな存在である。(中略)皮肉なことに、もしヨーロッパの言語のうちで貿易上のやりとりのためのものがあるとしたら、それはバタヴィアにおいてさえポルトガル語なのであった。これは、貿易の面ではポルトガル人を蹂躪したものの、共感をもって現地の文化を見る努力をほとんどしなかったオランダ人たちにとつては、たいそう腹立たしいことだったのであるが」³⁴。

十七世紀の東洋におけるポルトガルの公的なプレゼンスの消滅「という現象」は、その理由はさておき、ポルトガル人エージェントには同じ程度には当てはまらなかったということは否定できない。彼らの「もつ」仲介者や通訳としての技能、そして貿易路や金融制度、政治制度、文化的背景についての知識は、実際のところ、現地の支配者やヨーロッパからの侵略者にとつて、重要な価値をもっていたのである。公的政策により現地人女性との結婚を奨励された男性であるポルトガルの「カザードス」は、永続的な居留地「を維持するため」のための必須要素であり、「現地に」根付くための要因として認識されていた。

十七、十八世紀を通しての、オランダやイギリスの影響力の真つた

だ中での、マカオやティモールにおけるこのポルトガル人の回復力に満ちたプレゼンスは、現地の支配者が誰であろうと、貿易ネットワークや協力の能力を維持する上での個人としてのポルトガル人エージェントの有用性についてのさらなる証左を提供するにすぎない。このことはまたわれわれを、自己組織化ネットワークが成し遂げたことについての議論に引き戻す。これらのネットワークは、東洋世界においてポルトガルの優位が失われた後に創出されたものではなかった。それはポルトガル領インディアの黄金時代から、すでに存在していたものである。

ポルトガル領インディア政府とその組織や代理人の力と、私的企業家たちの力の違いは、財政的指標によつても証明しうる。十六世紀末や十七世紀には、ポルトガル領インディアの防衛用の王室艦隊と陸軍を準備するため、ポルトガル人の自治体、とくにゴアの市政府に賦課金が繰り返し課された。同様に、ポルトガル領インディア政府の公的な予算が激減し、ポルトガル王権の代理人がヨーロッパ人の競争相手および現地の領主の双方からの攻撃に軍事的リソースをもつて対処することができなくなった時には、私的な貸し付けがゴアの現地の企業家や商売人に求められ、また「実際に」提供されたのだ³⁵。実際のところ、十七世紀の間、公然たる危機の時代には、王室財政の枯渇と破産「という状況」は、私的企業家の「財政」状況とは決して呼応していなかったということは明らかに思える。インド洋および太平洋におけるポルトガル王権の公的なプレゼンスが崩壊していく一方で、十六世紀末以降、私的なビジネスは、王権の代理人によつて行なわれている時でさえ成功を収めていたようなのであり、ポルトガル王権の公の敵とすら取引していたようなのである。このことはわれわれを議論の主要な論点へと導く。すなわち、グローバル化の主要因としての個

人の主導権と自己組織的で非公式のネットワークがもつ重要性である。

二二 ポルトガルの東洋での商業拠点における

自己組織的ネットワーク

ポルトガルおよびヨーロッパの歴史研究は、ポルトガルの商業的拡張を、王権が主導する「商業的」独占戦略に基づくものとして描いてきた。実際、ポルトガル王権がいくつかの独占を課していたのは事実であるし、また独占的システムが、個人のイニシアティヴを損ないつつ、国家の政策の優越へとつながっていたことも事実である。しかし、十五、十六世紀のポルトガルのケースにおいては、この独占的なモデルは、「西アフリカの」ミナの金貿易とケープ航路の香辛料貿易についてのみ認めうる「に過ぎない」。ジェイムズ・ボヤジアンはこう述べる。「ケープ貿易の当初から、その立役者たち——ポルトガル王とポルトガルの貴族層——はその事業を、アジアや他の軍事拠点で国王に奉仕した貴族への特権の譲与を伴う、王室の独占事業と見なしていた。アジアにおける私貿易は後からの付け足しであり、国王はその成長を妨げるための障壁を設けたのであった。ポルトガルの法は、イニディア行きの船の出港を許可する権限を与えられた唯一の港たるリスボンにおいての「荷の」積み込みを厳格に統制していた」⁽³⁶⁾。

とはいうものの、「アジアにおける貿易への」参加の広大な領域は、「私的な」商業的イニシアティヴに開かれたままであった。香辛料貿易と銀・金貿易のみが王権の独占物だったのである。私的企業家はアジア間貿易において仲介者として行動することができた。そして、リスボンへと向かうカラック船によって相当量の産物を運ぶことが認められていたのだった。「それはすなわち」、生糸・絹織物、磁器、家

具、布地、タペストリー、宝石や半貴石、香水といったものである。また、個人的奉仕のための奴隷も同様に運ばれた。これらは様々な程度の利益の可能性を見込めるものであった。

香辛料に関する厳格な「貿易」独占政策でさえ、個人のイニシアティヴを完全に排除しうるものではなく、しばしばそれらと共存していた。これは、違法で、「公的な独占貿易と」並行して行なわれていた商品や資本の流通たる密貿易についてのみいつているわけではない。独占的「貿易」経路に単一の仲介者の存在「のみ」を認める、国家自体に認可された「公的貿易」内部のメカニズムについてもそうなのである。ポルトガルにおいては、独占的香辛料貿易の全盛期であった一五六〇年の時点でも、王権によってとり扱われていたのは、全生産物のうちの六十パーセントだけであつた。ヴィトリノ・マガリャンイス・ゴデイーニョによつてずっと以前に証明されたように、残りの四十パーセントは、国王の許可のもとで個人のエージェントによつて取引されていたのである⁽³⁷⁾。

同様のことが、東洋および極東との貿易に関して、「インド南東部の」コロマンデル海岸の諸港にも起こっていたようである。ロープ・ソアレス・ドウ・アルベルガリーの統治以降、ベンガル湾は商人や傭兵、そして私掠者たちにとつての好機の間だったということを銘記しておくことが重要である。公的な任務が強化され、「海軍の」艦隊がこの海域を巡行するために設立された時でさえ——その艦隊は一五三〇年代には活動を終えたのだが——これらの個人やもぐり商人、そして時にはよそ者までもが絶えず活発に活動していた。強奪、わいろ、詐欺、そして海賊行為が、インド洋におけるポルトガル人のプレゼンスの副産物として出現した。それはとくにベンガル湾やコロマンデル海岸においてそうであつた。それらの地域では、ポルトガルの公

的な統制は、皆無とまではいえなくとも、無視しうる程度であった。また、そこにおいては、重要な海運や貿易のネットワークが、マイラブルやネガパトナムをマラッカと結ぶ形で交差していたのだった。³⁸⁾

コロマンデル海岸で観察され、証明されたようなこれらの傾向は、インスリンディア（東南アジア海域）、および極東の貿易路において、いっそう顕著であった。これらの貿易路は、当初はケープ航路の延長、そしてコーチンで香辛料「の到着」を待つカラック船に食糧を補給する手段であったが、「その後」次第に自立を遂げていった。そこでは、ポルトガル人が広大で異種混交的なアジア間地域貿易における仲介者としての役割を果たしていた。それは、大量の積荷を運送する能力や、彼らに海洋の威圧的な支配権を与えていた船に搭載された重火器といった利点を有する仲介者であった。

移動するこれらのエージェントは、「カザードス」（これが、史料中で商人に対して用いられている唯一の用語である。もともと東洋においては「この語は」そのようなものとしては認識されていないのだが）、役人や宣教師を含んでおり、それらの人々は西アフリカ沿岸から日本にまで広がる拠点のネットワークを通じて旅をした。また、相当数の他の非公式のエージェント、とりわけ水夫や兵士、冒険家といった人々も含まれていた。ケープ航路のカラック船が到着してから出発するまでの待機時間の長さや賃金支払いの遅れに加えて、乗組員や守備兵には乗船している間、あるいは抗争の間だけ賃金が支払われたという事実が、脱走率の増加をもたらした。これらの人々はまた、私掠や、現地の有力者のもとでの任務、あるいは前例のないほどの高い利益率が見込める貿易の機会が提供するチャンスの展望によっても、「脱走へと」駆り立てられたのだった。

「貴族／商人」、在俗の司祭であれ宣教師であれ「聖職者／商人」³⁹⁾、

あるいは「水夫／商人」が、この文脈における支配的な社会的類型である。行政、軍事、財政、宗教、あるいは航海といった活動の海外貿易との重なり合いは、歴史的に証明された事実であり、様々な含意を有している。その究極的な例は、イエズス会士が日本で行なっていた貿易独占であるが、われわれは「のちに」このトピックに立ち返るであろう。

これらのパターンから、強力な非公式のネットワークの仲介「という現象」が立ち現れてくる。個人のイニシアティブや私的利害は、東洋におけるポルトガルのプレゼンスの真のダイナミズムを理解するために、そしてポルトガル領インディアの発展や東洋におけるポルトガルの衰退を十分に理解するためにさえ、もともと重要なものである。ルイス・フェリペ・トマースは、これらのダイナミクスの結果を強調したポルトガル人歴史家の一人であり、「彼の」研究は、とりわけアンソニー・デイズニー⁴⁰⁾や、サンジェイ・スブラマニヤン、そしてジェイムズ・ボヤジアンによって提供された分析的視点と実証的証拠によって補強された⁴¹⁾。

帝国横断的で越境的なネットワークの働きは、東洋において疑いなく存在していた。それらはケープ航路の運用にとって、そして労働力の調達すら現地市場に依存していた海軍艦隊への補給のために不可欠であった。また、東洋におけるポルトガル人のプレゼンスの維持を可能にする上でさらに重要となるもの、すなわち、ポルトガル人のアジア間貿易の仲介者としての役割を保証する上でも不可欠であった。この仲介の複雑さは、一五七〇年頃にゴアやマラッカ、そしてマカオから放射状に伸びていたルートの数からもうかがえる。「実に」二十七年のルートが存在したのである。

それらは以下のものを含んでいた。ゴアからホルムズ、モザンビー

ク、セイロン「スリランカ」、モルッカ、コロマンデル、ベンガル湾、そしてマラッカへのルート。マラッカからタイ、マカオ、日本、ビルマ、モルッカ、そしてバンダ諸島へのルート。マカオから日本、インドネシア、タイ、そしてティモールへのルートである。⁽⁴²⁾セイロンではシナモン、モルッカ諸島では丁子、バンダ諸島からのナツメグとメーヌ、あるいはティモールからの白檀、中国からの生糸・絹織物、ペグーからの漆などの奢侈品を求めて、あるいは単に織物や米、材木の運搬人として、ポルトガル人は広範囲にわたる異文化間接触の仲介者となったのである。

三 日本におけるポルトガル人 ——イエズス会士の役割

日本におけるポルトガル人のプレゼンスは、このグローバルな枠組みの中で理解されるべきであり、これらの線に沿って分析しうる。ポルトガル人の日本人との接触のおおよその進展「の過程」は、よく知られているところである。ポルトガル人は一五四三年に日本に到着した。二人のポルトガル人——そのうちの一人は、商人であり冒険家でもあるフェルナン・メンデス・ピントといわれている——は種子島に到着した中国「明」船の乗客であった。ポルトガル人は日本人との取引を切望しており、彼らはすぐに戻ってきた。中国と日本の間の貿易が、南シナ海における倭寇の海賊行為を含む数多くの事件によって生じた抗争や戦争のあおりを受けていた時期にあって、ポルトガル人はすぐに二つの領土の間の仲介者の役割を担うようになった。⁽⁴³⁾個人のエージェントの重要性、第三者——この場合は華人船員——によって仲介された最初の接触、そして、この特定の状況がもたらした好条件

にうまく適応したポルトガル人が担ったブローカーとしての役割、これらはすべて、非公式で自己組織的なネットワークの機能を示す要素である。

日中貿易での商人としての活動に加え、ポルトガル人はいくつかの新しい産物を日本人にもたらした。すなわち、タバコ、サツマイモ、時計、それに銃である。ヨーロッパの銃の導入は、日本の国内政治の進展に主要な役割を果たすこととなった。現地の領主「大名」たちが権力をめぐって相争う、封建的政治構造のもとでの全面的内戦という状況下にあつては、ヨーロッパの銃の専門知識は、幾人かの軍事的指導者に明らかな利点を提供したのである。ジェフリー・パーカー⁽⁴⁴⁾は、軍隊が連続射撃の可能な火縄銃部隊を急速に設立していくにつれ、いかにしてこの要素が深いレベルでの軍事革命に影響を及ぼしたかを示した。

「このように」日本人がヨーロッパのライフル「火縄銃」を取り入れたことは、個人を基盤とする協力関係のダイナミクスのさらなる^{あかし}証といえよう。国家主導のいかなる対立的戦略も、火縄銃の使用を通して日本人に与えられたこのような軍事的優越性を、敵方には提供しえなかったことであろう。新しい武器をどう扱うかについての解説を書くことや、それがいかに機能するかを理解したり、それを大量に生産したりする能力、そして火縄銃隊を基盤とする新戦術の発展、こういった事柄は、個人レベルでの交換に基づく文化変容の過程と技術移転の中心的要素をなすものである。「そして、」このような個人レベルでの交換は、生産物や貿易「のグローバル化」のみならず、技術や知識のグローバル化のダイナミクスにも貢献したのであった。

「南蛮人（南方の野蛮人の意）」——日本人はポルトガル人をこう呼んだ——は、その活動を九州に集中させており、一五七一年までに長

崎に通商のための居留地を作り上げた。イエズス会士は、現地のキリスト教徒の領主「キリシタン大名」である「大村」バルトロメウ純忠の決定により、のちにその居留地の行政を担うことになる。九州は、日本においては「京の」都からは遠い辺境の地であり、内戦の影響は軽微であった。

アジアにおけるポルトガル帝国との関連においても、「九州の」位置は、ポルトガル領インド政府の司令部たるゴアや、ポルトガル人が主導する主要な航路の双方から「の隔たりという点から」見て、同様に周縁的なものであった。ポルトガルの公的プレゼンスがマカオを除いていまだ確立されていなかった東アジアの周縁部にあっては、日本におけるポルトガル人のプレゼンスは、個人的接触と、ポルトガル人や華人、そして日本人商人を含む自己組織的ネットワークの働きに基づくことなしには存続しえなかったのである。非公式性と順応が、そのようなネットワークの機能の二つの主要な特徴であった。そしてそのネットワークの働きは、広州の市における中国の商品、主に生糸・絹織物の購入とそのマカオへの輸送、そしてその日本への最終的な輸送を伴っていたのだった。

その「日本という」領域におけるイエズス会士の宣教活動を通じて、この枠組みにいくつかの公的な構造が導入されることとなった。一五四九年、フランシスコ・ザビエルに率いられたイエズス会宣教師が、宣教師団を確立し、日本人をキリスト教徒に改宗させる意図をもって日本に到着した。商人とは異なり、広範囲での福音伝道という彼らの使命を考えるならば、彼らの活動は「うまくいっていれば」最終的には大きな影響を日本に与えていたことであろう。イエズス会士たちは恒久的な宣教師団を設立し、「キリスト教を」日本の領土中に広めることを目指した。一五五一年に、フランシスコ・ザビエルは、日本の

政治的中心地に足掛かりを得ようと、「京の」都に赴いた⁽⁴⁵⁾。そして一五五四年には、「この時」一時的にイエズス会士の一員となっていたフェルナン・メンデス・ピントが、副王により使節として豊後の大名のところに派遣された⁽⁴⁶⁾。

イエズス会士たちは「やがて」日本における政治的な内部抗争に関わることとなった。彼らはそれを通じて現地の領主から利益や支援を引き出そうとしたのである。少なくとも、イエズス会士が「日本に」いた最初の数十年間は、それはうまくいったようであった。キリスト教は受け入れられるか、あるいは少なくとも他の宗派の間で許容され、イエズス会士は彼らの宣教師団の数を増やすことができた。一五八八年までに十五万人以上の洗礼を受けた日本人がいたという事実は、イエズス会士の戦略の成功に関する明白な「証拠」である。彼らは極東において、ヨーロッパや東洋でとつたのと同じ戦略を実行しようとした。すなわち、エリート層の改宗であり、それは日本で彼らの臣下の大量改宗をもたらしただのである⁽⁴⁷⁾。

イエズス会士とともに、宗教、政治、そして最終的には貿易が、構造的な傾向となった。それはまたしても、ポルトガルの拡張全体におけるよく知られた変化の過程をなぞるものであり、日本での布教において大きな意義をもつべく企図されたものであった。

イエズス会士による現地の政治闘争への関与や、全般的内戦という「日本の」状況、そして現地権力の分裂状態は、日本におけるその活動の初期においては、彼らの目的やゴールにとって有益であると判明した。しかし長期的に見るならば、同じ戦略は、いくつかの危険な動きに加えて、日本の政治的バランスに対し過度に侵略的なものと受け取られ、さらには二心を抱いての反逆的な行ないとすらみなされて、日本におけるイエズス会士のプレゼンスに悪影響を及ぼすこととなった

た。「その結果」彼らは、一五八七年に豊臣秀吉によって署名された最初の反キリスト教勅令「バテレン追放令」の要因となり、また一六一四年の日本からのイエズス会士の追放令、そして最終的には一六三九年のポルトガル人追放令の要因にもなったのであった。その中において日本でのイエズス会士の地位が変転していった枠組みの全体を理解するためには、ここでもまた、協力や欺き、逃亡といった振る舞いを考慮に入れる必要がある。

ポルトガル人が「日本に」いた時期には、日本の戦争は、前述のように小火器と大砲の導入によって劇的に変化していた。織田信長の勝利はよく知られているところである。新しい武器をいかに使うかを急速に学んだ後、彼は一五六九年に堺の港を奪い、一五七五年には長篠の合戦で大勝をおさめた。一五八二年に暗殺されるまでに、信長は「すでに」日本の中心部を統制下に収めていた。日本の再統一という仕事は豊臣秀吉が続けた。彼は一五八七年に九州を平定し、一五九〇年までには東日本をも征服していた。彼の重臣であった徳川家康は権力を奪取し、強力な政治力と軍事力をもって日本の再統合「⁽⁴⁸⁾という仕事」を追求した。

この「日本の」統合という新しい文脈の中で、イエズス会士「の存在」は分裂を意味した。それは宗教的な面においてだけではなかった。政治的駆け引きに長け、知的に熟練し、彼ら自身の目的「の達成」に邁進する急成長中の権力として、「イエズス会士の存在は政治的な面においても」分裂を意味したのである。彼ら「イエズス会士」の政治的策略は、新たに生まれた「日本の」中央集権的権力にとって容認しえないものだったようである。キリスト教という、この新たな宗派による、仏教の僧侶や現地住民、そしてその慣習に対する全般的な迫害、および寺院や偶像の破壊に対する非難は、イエズス会士を

追放する上でのさらなる理由となった。彼らの貿易への関与の条件——われわれはやがてこの点に立ち戻るのだが——は、「イエズス会に対してそれまでに存在した」この敵意につけ加わったにすぎなかった。

さらに、たとえ彼らが十六世紀末の到着以来、現地の領主層にとって仲介者やブローカーとして有用であったとしても、他のブローカーが日本に入り込もうと試み、より少ない「政治的」関与で同様のサービスを提供していた時期には、彼らの存在は「以前ほどには」決定的「に重要なもの」ではなくなっていた。まず、スペイン人が、ポルトガル人を出し抜こうとした。それからオランダ人が、その時までポルトガル人が商人および宣教師として——イエズス会士の場合、この二つの立場が区別しうるとしてだが——遂行していた独占的關係の「新たな」重要な選択肢として登場したのである。それでは、「当時」存在していた商人ネットワークとイエズス会士が果たしていた役割を分析してみよう。

商人、冒険家、傭兵、そしてアウトサイダーでもあったポルトガル人は、現地のエージェント、すなわち華人の水先案内人によって導き入れられ、伝統的な貿易路を利用し、また新しい貿易路も開拓しつつ、新たな地域に侵入した。そして十六世紀後半に、当時もつとも儲けが多く見返りの多かった貿易路の統合に貢献した。すなわち、マラッカと中国をつなぎ、また中国と日本を結ぶルートである。当初は密貿易によって維持されていたこの交通は、ヨーロッパ人によって行なわれるアジア間貿易においてきわめて有利な地位をポルトガル人にもたらした。そして彼らはそれを、ほとんど丸一世紀にわたって独占的に占有したのだ。極東の国内政治情勢に加え、彼らの運送力、および武器の優越性が、ポルトガル人に好機の広大な領域を保証した

のである。

この過程における本質的な特徴は、協力であった。実際ポルトガル人は、当初から未知の水域を現地の水先案内人の助けを借りて横断していた。ポルトガル人が最初に海路によってインド洋に到着した時、彼らがソファアラからカリカットまで、現地のイスラム教徒の水先案内人であるアフマド・イブン・マージドによって先導されていたことを想起してみればよい。⁽⁴⁹⁾アラブ人、グジャラート人、ジャワ人、そしてマレー人の水先案内人は、マラバルからセイロン、マラッカ、スンダ列島、ジャワ、モルッカ諸島、スマトラ、そしてタイへのポルトガル人の航海においても見られた。それは華人の水先案内人が、マラッカ、マカオ、日本間の航海においてしばしば用いられたのと同様であった。⁽⁵⁰⁾

マカオはこの交通における中枢であった。マカオは、日本との最初の接触が起こった時には、まだポルトガル領インド政府によって統制されない、商人たちの共和国であった。個人のイニシアティブによる仲介のおかげで、その都市は、無名の周縁的な場所から、極東の海上貿易路における要^{かなめ}の地へと急速な変化を遂げたのである。貿易のダイナミクスは、主として周辺のエージェントや東洋におけるポルトガル帝国のアウトサイダーが統率する、自己組織的ネットワークによって創り出された。密貿易の中枢として始まったマカオは、「やがて」主要な自治体組織である市評議会とゴア⁽⁵¹⁾マカオ間航路を運営するカピタンの権限によって支配される、商人の共和国へと発展を遂げた。実際のところマカオは、日本へのゴア航路のカピタン・モールによつてのみ「本国」政府が代表される領土として始まったのであり、商人的共和国の一類型をなすものであった。マカオがそれ自身の在地のカピタンを迎え入れるようになったのは、ようやく一六二三年に

なつてからのことである。

マカオを通じてのポルトガル人による日中間の仲介が、非合法かつ不規則で、「公的貿易と」並行して行われる「貿易の」経路という状態を脱して、恒常的な海上貿易の営みへと次第に変わっていくと、国王はこの航路を、国王勅令により自らのものとし、それを奉仕に対する報酬として貴族の手に委ねた。⁽⁵²⁾マカオの現地商人は、商人の財産に応じて事前に定められていた料金に従い、貨物の運送をカラック船の船長と交渉しなければならなかった。「しかし、このような慣行は」もともと裕福な商人の幾人かにとつてのみ有益であるとみなされていたため、マカオ、中国、そして日本の教会行政官であったメルキオール・カルネイロ「ベルキオール・カルネイロとも」——彼自身イエズス会士でもあった——は、一五七〇年代に運送貨物の割り当て「制度」の改善を試みた。「彼の」この提案においては、イエズス会士も新たな貿易モデルの監督官として含まれていた。「このモデルは」、定量の契約（アルマサン契約）に基づくものであり、慈善院やイエズス会士自身のような、営利目的でない他の諸機構と同様、より小規模な商人の「貿易への」参加も見込んだものであった。

のちには、主な積荷の輸送先である日本の長崎でも、同じパターンが形作られる傾向が見られた。そこでは、自由な取引はパンカード契約——すなわち、投機を防ぐために生糸の積荷すべてが単一の価格で売却されるという形態——にとつてかわられた。ジョアン・ロドリゲス・ツヅに代表されるイエズス会士たちは、ジョアン・ロドリゲスが徳川家康の代理人に指名されたことで、またもやこの制度の主たる調整役となった。ポルトガル人商人と日本人商人の仲介者であった彼らは、日本の領主のためのブローカーや貿易エージェントとしても活動した。彼ら「イエズス会士」自身も、相当量の積荷と共にこの貿易に

関与していたので、この地位は彼ら自身の利益にもなったといわれている。これらの「領主たちの」積荷は、彼ら自身の「積荷の」割り当て分と一緒にされて、第三者を通じて取引された。「このような貿易は」、より有力な大名幾人かのためのブローカーや貿易エージェントとしての彼らの地位から生じたものであり、そこから彼らは、広東の市で商品を買うための銀を、自らのために得ていたのであった。

注意すべきは、銀取引が国王の独占物であるとみなされていたという点である。それ「私人による銀取引」は非法で、ポルトガルの王令によって完全に禁止され、マカオにおいては大逆罪に値する事柄として扱われていたのであり、マカオでは違反者には破門も課されたのだった。このような禁止はまさしく、マカオ・日本間の独占的航路を避け「日本と」直接貿易を行なうことで密輸の機会が増える「という事態」を阻止することを目指したものであった。もしわれわれが、イエズス会士たちがアルマサン契約によってカラック船上に追加の商品を含むことも認可されていたこと、そして彼らの割り当てが、時が経つにつれ著しく増加していったということを付け加えるならば、イエズス会士がこの公的貿易において占めていた主導的な地位を理解することができよう。

これとは別に、ローマへと送られる書簡や修道会の巡察師の報告書の中には、毎年の貿易ルートや日本におけるパンカード制の枠外で、イエズス会士が「それらと」並行する貿易に参加していたという主張もみられた。そして、「公式の市と」並んで開かれていた長崎の外の市場——そこではより良い値で売ることができたのだが——において、彼らがしばしば生糸を売っていたということが証明されていた⁽³⁵⁾。ポルトガル王権の代理人やポルトガルの布教保護権の構成要素という公的な立場からはかけ離れて、彼らはこの状況下で、ポルトガルと日

本双方の貿易統制の周縁部において、非公式で自己組織的なネットワークとして機能していたのである。

日本の言語や経済、市場について広範な知識をもち、現地の商人と密接に結びつき、ポルトガルの布教保護権全体の中で機能するネットワークに属し、「そして現実には」彼らがそうしていたように、金融や貿易への投機に用いるための信用を得ることができたイエズス会士は、実際のところ、ブローカーとして特権的な地位にあった。そして彼らはそのような立場を生かして、宣教師としてと同様に、貿易商人としても活動していたのである。

彼らのこの貿易への参加が、清貧の誓いを要する教會的地位の一般原則と彼ら自身の内規の双方とに反していたことには注意すべきである。違法性が高く、きわめて実入りの多い、この実施されていた慣行のその後の合法化を推進するためには、ローマのイエズス修道会の総長や教皇、そして国王から特別な勅令を得ることが必要とされた。一五六〇、七〇年代には、修道会の総長は「その交付を」頑なに「拒否」していたが、その後、イエズス会士はそれらすべてを得ることができた。マカオ・日本間の貿易に公的認可を与える教皇の許可は、一五八二年になってようやく得られたが、それは単に「実際は」すでに長い間行なわれていた慣行を、公式のものとしたにすぎなかったのである。

この一見したところ例外的に思える地位の正当化は、実際の神学に基づいてなされたものであった。それによれば、貿易の利益は宣教活動に不可欠なものであり、教会や国王からの公的資金は、日本において絶えずその数が増加していく施設やイエズス会士の保護領の必要を満たすには十分でない、あるいは「そのためには資金の」到着が間に合わない、と主張された。宗教が貿易を正当化したのである。キリ

スト教化が儲けを正当化したのである。一五八〇年代のマカオ・日本間の海上貿易路においてイエズス会士は主要な生糸貿易商だったのであるが、彼らの宗教的地位や、一見したところ非営利に見える意図が、「イエズス」会が勝ち得たあらゆる種類の特権を正当化したのだった。

「イエズス」会の一員としてであれ、あるいは個人のエージェントとしてであれ、イエズス会士による非合法貿易への並行しての参加——彼らは、王権のカラック船「による公式の貿易」と並んで行なわれていた密貿易において、マカオや中国への銀輸入や密貿易船での積荷の運送に関与していた——は、同様に多くの記録によく留められている。日本での宣教活動を保証するために行なわれていたとされる「イエズス」会による貿易に加え、ヨーロッパ人会士・日本人会士の双方を含む個々のイエズス会士の仲介「による貿易」は、相当量の商品を活かしていた完全に非合法な商品とカネの流通の枠組みの中で認識されるべきなのである。

この貿易に加え、ローマとの通信文の中で繰り返し議論となっていたもう一つの「貿易の」領域も、さらなる検討に値する。それはイエズス会士の日本での奴隷貿易への関与である。「これに関しては」二重の見方が存在していたようである。一方では、イエズス会士は人身売買を非難し、ポルトガル国王に九州のポルトガル人居留地における奴隷貿易を禁止するよう要請すらしていた。そしてこれは国王セバスチアン「一世」によって一五七〇年に認められたのであった。他方で、日本における「イエズス」会の準管区長であるガスパル・コエリヨは、イエズス会士が奴隷貿易にひそかに関与していたとして非難されていると述べていた。「彼らは」、取引している日本人奴隷は必要な法的条件に則った上で獲得されたものであると、おそらくは虚偽の

陳述により保証していた奴隷貿易商人に対して、奴隷の販売許可証を発行していたというのである。⁽⁵⁴⁾たとえイエズス会士自身が人身売買に「直接」関与していたことは証明されていないにしても、「イエズス」会は奴隷貿易ネットワークの実行と組織化に関して、間接的な責任は有していたようである。「そして」そのネットワークは、以前に存在していたネットワークよりも、さらに広範囲の影響を現地の人々に及ぼすようになったのだった。

イエズス会士が成し遂げた、日本を含む貿易経路におけるこの密接な関与と強力な立場は、当時、活発で白熱した議論の的となり、いくつかのレベルで厳しい批判を受けることになった。彼らは実際、イエズス会士の専門的知識と特権により影響を蒙った商人たちからの批判の的となった。また同様に、彼らを貿易の仲介者として用いながらも、その二心ある振る舞いを疑っていた現地の領主たちからの非難の的にもなっていた。一六一〇年の市の総督「長崎奉行」の命令によるジョアン・「ツツ」・ロドリゲスの長崎からの追放は、このような文脈で理解されるべきである。

加えて彼らは、他の聖職者のエージェント、すなわち他の修道会や、国王その人からの反感も買っていた。フェリペ三世は、一六〇七年、一六〇九年、そして一六一〇年に勅令を公布し、イエズス会士による日本での貿易の仲介を禁止した。しかし、この禁令はいかなる公的な効果も有することはなく、一六一一年七月までには取り消された。「その取り消しは」、イエズス会士は東洋における他の宣教団のよう、定期的かつ十分な資金が供されてはおらず、貿易は日本でのキリスト教化と宣教活動実施のための主要な基盤であるとの主張のもとになされたのだった。⁽⁵⁵⁾

いかなる理由であれ、日本におけるイエズス会士の存在を考える際

に、宗教を貿易から切り離すことは不可能である。⁽⁵⁶⁾それは、日本を含む貿易経路へのイエズス会士の公的かつ認可された参加を、非公式で非認可の参加から切り離すことが難しいのと同様である。イエズス会士を中傷する論文を書いたフランシスコ会士のサン・ペドロのセバスチアン神父は、イエズス会士の長崎における宗教施設は税関所として知られていると説明し、それを、セビーリヤにおいて国王支配下の「スペイン領」アメリカとの全貿易を統括していた機関に与えられていたのと同じ名称である、「商務院」にたとえている。⁽⁵⁷⁾

日本におけるイエズス会士の活動は、われわれの議論の他の側面にも光を当てる。すなわち、「スペイン帝国とポルトガル帝国という二つの」帝国の境界を超えるようなネットワークによる、この枠組み全体に対する干渉である。一五七〇年代以降、アメリカからマニラ・ガレオンが定期的に到着するようになり、またフィリピンにおけるスペイン植民地のプレゼンスが強化されると、ポルトガル人とスペイン人の植民者や商人の活動の境い目を見極めることはますます難しくなっていた。法的には、スペイン人はポルトガル人の居留地に干渉したり住居を構えたりすることはできなかったが、現実はまだ異なっていた。まず第一に、マカオとマニラを結ぶ船舶の活発な活動が存在していた。スペイン人はマカオから、中国やマラッカ、日本に到達しようとは絶えず試みていた。たとえマカオの自治体権力である市評議会が、公的には彼ら「スペイン人」のプレゼンスに反対していても、「実際には」法に従わなかったスペイン人のカピタンや船長、貿易商人らの処罰を拒否したという記録が存在している。おまけに、カステイリヤ人であるドミンゴス・セグラードは、ポルトガル人ジョアン・ダ・ガマからマカオ・日本間航路を担当するカラック船のカピタンの地位を得ており、それによりマカオの臣民に対する裁判権を獲得

していたのだった。⁽⁵⁸⁾

マカオから中国および日本へは、幾度かの航海がポルトガルとスペインの臣民双方によって違法に組織され、合同の資本が供給された。これらの船は、中国への途上において、とるべき航路を見定めるためにイギリス「イングリランド」船によって跡をつけられた。ポルトガル人水先案内人は日本船の乗組員の一人であった。彼らは高賃金の支払いに惹きつけられたのであり、日本の指導者たちがそれに沿って行動していた日本の港や海上貿易の閉鎖政策に対抗して、巧みに船を操って「それを切り抜けて」いた。彼らはまたカステイリヤ船に対してと同様のことを行なった。「カステイリヤ船に」水夫としてだけではなく、水先案内人や船長としても乗り組んでいたのである。ナシヨナリティの多様性は、アジアの乗組員や艦隊——それが日本のものであれ、中国のものであれ、あるいはヨーロッパのものであれ——における恒常的な特徴であった。

マカオは、様々なナシヨナリティや信仰を有する商人が、活動や商売を横断的に行なう中心拠点であった。カステイリヤ人による、マニラから中国や日本に向かう遠征航海が繰り返し組織された。同様にポルトガル人によるマニラ行き航海も組織された。「インドの」コーチンのカピタンさえもが「このような」航海のうちの一つを組織しようとした。実際のところ、これはシステムのアウトサイダーによつてのみ行なわれた周縁的な活動などではなく、公的制度の中心人物をも巻き込んだものだったのである。

このポルトガル王権、あるいはポルトガルの利害への忠誠心の問題は、現在検討されているもう一つのトピックである。張天澤は、彼の「中国Ⅱポルトガル貿易」に関する著作の中で、いかにして日本に住む幾人かのポルトガル人商人が高名な日本人商人の娘と結婚して、ポ

ルトガルではなく、日本の貿易利害の擁護者となつたかを示している⁶⁹。これは、ヴェルデ岬近郊の沿岸に居住していたポルトガル人および現地商人が関わる、西アフリカの沿岸部でも同様に認めうる傾向であった。

最後に——といって重要性がもつとも低いというわけではないのだが——これらの帝国の境界を越える越境的な貿易ネットワークの構築と維持において積極的な役割を果たしていたのは、俗人のエージェントだけではなかった。カステイリヤ人は、マラッカや中国におけるポルトガル人居留地、そして日本におけるポルトガル人居留地にすら浸透しうる宗教的エージェントを主に用いていた⁶⁰。中国のケースがその良い例である。一五七五年以降、アウグステイノ会、ドミニコ会、フランシスコ会、そしてイエズス会が、カステイリヤ人によるこの領土「中国」への浸透と貿易関係の開始のための体系的試みを仲介した。「しかし、」これは即座にポルトガル貿易商や、ポルトガルの代理人、そしてポルトガル人聖職者からの反発を招いた⁶¹。われわれは、一五八〇年から一六四〇年の時期のスペインとポルトガルの王家の合同により、この時までに「両国の」国王が同一の人物となっていたことを忘れてはならない。

イエズス会士の日本における達成を分析するに際しては、必然的に、政治と貿易の他に、第三の関連するトピックも考慮に入れなければならない。それは日本におけるイエズス会士の宣教活動と文化的適応(acclimation)の過程である。「ここで」イエズス会士によってとられた福音伝道戦略を詳細に検討するつもりはないし、あるいはまた彼らの文化的適応の過程を分析するつもりもない⁶²。しかしながら、われわれはもう一つの別種のネットワークの形成を無視することはできない。それは、ヨーロッパ人イエズス会士と、「彼らと信仰を共にす

る」兄弟でありイエズス会の宣教の補助要員でもあった日本人イエズス会士との間に生じた個人的な相互交流である。これはもう一つの研究領域、すなわち、グローバル化のさらなる次元である間文化性(interculturality)「の問題」にもつながるものである。

上述のイエズス会士の日本における宣教活動の特殊性、東洋におけるポルトガル帝国の権威の中心に対しての独自性、マカオから年に一回来航するポルトガル商人との時折の接触、福音活動の中心から見た場合の周縁性、東洋におけるポルトガルの布教保護権の内部における特殊な地位、これらすべてがあわさって、イエズス会士を、もっぱら日本「という地域」それ自体がもたらす内的条件に依存させることとなった。この状況はその過程で、利点とともにいくつもの問題も引き起こした。なぜならばイエズス会士の宣教活動は、日本への「キリスト教の」強制を意図するような外国の政治的権力とは結びついていなかったからである。

このようにイエズス会士は、大名たちの保護と福利、および現地のエージェントからの協力と助力に同時に依存していた。福音活動に関しては、二重の戦略が存在した。「一つは、もとは」仏教の制度である「同宿」^{iv}の採用である。彼らは「修道士になるために必要な」誓願はしていなかったため、聖職者としてではなく「あくまで」協力者として、また教義問答の領域においてさへ助手として行動した。「二つ目は」、日本人を「イエズス」会のメンバーとして認め入れることによる、現地人聖職者層の形成である。時が経つにつれ、彼らの数は両方のケースにおいて増加し、ヨーロッパ人のイエズス会士のこれらの人々への依存は、宣教活動を維持する上できわめて重要なものとなった⁶³。

現地人聖職者の組織「化」を実施するという決定は、たえず調査と

議論の対象となった。「ヨーロッパとの間の」通信文や報告書からは、以下のことが明らかであるように思える。すなわち、日本におけるヨーロッパ人イエズス会士が、「現地人聖職者の」その地位を懸命に弁護する一方、それはヨーロッパ、すなわちローマにおける制度化された聖職位階制^{ヒエラルキ}からは強い反発を受けたということである。大量の現地人聖職者団の設立は、ポルトガルの布教保護権の枠組み全体においてはまだ例外的なものであり、それは、その選別の基準がヨーロッパにおいてすら非常に厳格であったイエズス会士に関して、とりわけそうだったのである。

日本において異なる政策をとる必要性は、一五八七年以降、とくにヨーロッパ人宣教師が追放された一六一四年に増加した。イエズス会士たちはその時までに、日本でのキリスト教の維持は現地人聖職者の活動にかかっているということを理解していた。叙品の件数はその時に増加した。もともと「ヨーロッパ人」イエズス会士たちも、商人や水夫に変装して、以前の彼らの活動領域にしばしば舞い戻ってきたの⁶⁶ではあるが。

イエズス会士たちは、現地人聖職者を認め、その叙品を行ない、また彼らの活動において相当数の同宿に頼っていた。しかしながら、これらの「現地人」メンバーに対する批判的意識、彼らの習慣への一定程度の無理解、そして彼らの規律や服従の欠如についての絶えざる訴えが、イエズス会士の手紙の中にしばしば見られたということは明白である。避けがたいヨーロッパ中心主義的な立場や、現地の協力者の日々の慣習や心理的側面への無理解は、「彼らの」手紙の大半に、とくに一五八〇年代以降に見られたものであった。しかしながら、ヨーロッパ人イエズス会士が、「日本人協力者の」言語、文化、そして現地の政治的均衡に関する知識ゆえに、伝道や文化的接触、そして宗教

的關係の面で彼らに依存していることを率直に認める「こと」と並んで、日本人の側に優越意識を投影するような他の証言も存在した。

一五五一年に、コスメ・ドウ・トーレスは、ゴアにいる彼の同僚たちへの手紙の中で、熱意をもってこう述べた。「日本人は世界においてもっとも知的な部類の人々に属する。彼らは理性に嬉々として敬意を払うので、われわれよりも優れているのである。(中略)ヨーロッパ人は自らを教養のある人々とみなしている。しかし、日本人と比べた時には、われわれはかなり野蛮であるように思える。私は日本人が毎日私に多くのことを教えてくれていることを認めざるをえない。かくも多くの内なる技術を有する人々は、世界には他にいないと私は信ずる」⁶⁶。

一五八七年に、もう一人のイエズス会士であるペドロ・ラモンは、異なる文脈で次のように記した。「・・・私はすでに十年間彼らを相手にしてきたが、日々ますます驚いている。そして私は(もし不快にならずにこの比較をできるとしたら)こう言うのである。すなわち、この地にいるこれらの人々はヨーロッパにいる「人々」よりもはるかに良い。そして、このことには一片の疑いもない、と」⁶⁶。しかしこれは、イエズス会士への迫害がすでに発生していた当時であつては、たとえそれがまだ挽回できる時期であつたとしても、広く普及した見方ではなかった。

現地の日本人聖職者の「イエズス」会への完全な統合を目指す政策を表す「適応主義」(acomodatio)「という」概念は、実際に起こった「ことを反映している」とは思えない。反対に、ヨーロッパ人聖職者の優越意識、現地人聖職者が聖職位階制の中でより高い地位に就く上で「直面した」困難、公式の主張、「地元の領主など」現地の有力なエージェントをイエズス会士に対抗させることを企図した日本人聖職

者による政治的駆け引きといったことがらは、「修道会」内部に存在した緊張関係を証明している。繰り返し書かれた証言録は、ここでもまた利用可能な協力のメカニズムの全容を映し出している。協力、欺きや二枚舌といった振る舞いは日常茶飯事であった。同宿や日本人聖職者による宣教活動のたび重なる放棄は、彼らが適応していなかったことの明白な兆候であった。⁽⁶⁷⁾

間文化性は、実際のところ双方向に機能したのであり、ヨーロッパ人イエズス会士の方により効果を及ぼしたようである。文化的適応は、イエズス会士の日本でのプレゼンスにおいて見られた主要な傾向であり、それは避けがたいことであった。彼らは、「イエズス」会のヨーロッパからの来訪者すべてにとつて理解しがたいような仕方、現地環境に順応する傾向があった。後者「来訪者」は、どちらが改宗されたのか、すなわち日本人がキリスト教に改宗したのか、それともイエズス会士が日本文化に改宗したのかについて疑念すら抱くようになった。言語、食文化、イエズス会士の家や教会の建築様式、衣服、日々のスケジュール、自己処罰の性向、および第三者に対する体罰⁽⁶⁸⁾、これらすべてはヨーロッパ的というよりも、日本的であるように見えたのである。⁽⁶⁹⁾

四 結論

「これまでの議論を」要約すると、いくつかの考えを強調しよう。第一に、グローバル化は複雑で多元的な過程であるが、それはその経済的、文化的、エスニック的、言語的、そして環境的な意味合いにおいてさえ、ナショナルな帝国の働きよりもむしろ、言語的、文化的、地理的、政治的、宗教的なあらゆる種類の境界を横断する個人のエー

ジェントの活動に、よりいつそう関係するものである。公式帝国が強制的メカニズムへの傾向を示す一方で、グローバル化は協力に基づくものである。帝国建設の持続的で非公式の方法——これはしばしば帝国それ自体に逆らうものでもあったが——「の存在」を受け入れて認めない限り、帝国はグローバル化の過程とはほとんど関係のないものであった「ように見えることだろう」。

二つ目として、もし鏡の反対側を覗いてみて、個人の非公式ネットワークの間に作用している協力のメカニズムの働き（これは、欺きや逃亡、競争といった手段をも含む）を探るならば、グローバル化のメカニズムはさらによく把握され、理解されうる。これらのネットワークにおいては、権威と垂直性は、公的な構造においてよりもはるかに流動的である。そしてコミュニケーションの流れは、境界を超えて、これらのエージェントが従うことを期待されていた公的で制度化された規則に反してさえも、絶え間なく続くのである。

第三に、ポルトガルの海外拡張は全体として、多面的な海外帝国の建設と維持に対して、個人のエージェントと自己組織的なネットワークが有利に作用したあり様を如実に示すものである。それらはその建設に必要な不可欠であつた。「それら個人のエージェントや自己組織的ネットワークがたどった」道筋は、ある時には王権の政策や必要性に沿ったものであり、ある時にはそれ自身のゴールや目的、戦略を反映したものであつた。ポルトガル帝国の建設と崩壊「の過程」を理解するということは、それらのエージェントが、公式帝国の境界の内外で相互に交流したあり様の理解を伴うものなのである。

最後に、しかしもつとも重要度が低いというわけではないのだが、日本におけるイエズス会士の事例研究は、これらのネットワークが第一次グローバル時代において、いかに機能し、相互に作用していたか

についての、究極的な例をわれわれに与えてくれる。教会とポルトガル王権双方の公的なエージェントであったイエズス会士は、順応の過程において彼ら自身で行動した。「その過程においては」、彼らの決定と戦略は、遠く離れたポルトガルの東洋帝国の公的枠組み、あるいはカトリックの世界教会主義よりも、むしろ、日本と東アジアにおけるもろもろの制約や必要性、それに「偶発的」機会とより深い関係があったのだった。宗教、政治、そして貿易は、個々の仲介の不可分の領域であった。イエズス会士に関しては、政治的および経済的活動と同様に、宣教活動も、ポルトガル、日本、そして中国の、聖俗双方の分ちがたく混ざりあった、異なるネットワークの枠組みの中で理解されるべきである。強制、交渉、そして順応の過程は、ヨーロッパ人と日本人、そして他のアジアの人々の間のグローバルな相互交流の網の目を織り成しているものであり、それについての徹底的な考察と研究は、第一次グローバル時代を特徴づけるダイナミックで開放的、複雑で非直線的なシステムをよりよく理解するのに不可欠なのである。

* 本稿は、二〇一二年二月に、京都産業大学世界問題研究所主催で開かれた国際ワークショップにおいて発表された、ポルト大学のアメリカ・ポロニア教授の報告を日本語訳したものである。ポロニア教授は近世ポルトガル帝国史、植民地史を専門としており、本稿にも見られるようにポルトガルの海外拡張を中央権力の視点からではなく、(非公式で自己組織的な) ネットワークや協力といった概念を用いつつ、女性も含む多様なエージェントに注目して分析する点に特色がある。近年は、さらにヨーロッパの植民地拡張が環境に与えた影響にも関心を広げている。また、ポルトガルの海港研究など、海事史の分野でも著名であり、二〇一六―二〇二二年にかけては国際海事史学会 (International Maritime History Association) の Vice President を務めるなど国際的にも活躍している。なお、本稿の英語原文は『京都産業大学世界問題研究所紀要』第二十八号 (二〇一三年) に掲載されたが、原文には意味のとりづらい箇所もあったため、翻訳にあ

たっては原著者に確認して一部文章を改めた部分もある。「」内は文意をわかりやすくするために訳者が補足した語である。翻訳の出版を快諾していただいたポロニア教授、およびワークショップの開催に尽力された京都産業大学の玉木俊明教授にはこの場を借りてあらためて謝意を表したい。

(i) 訳注1 本稿のキーワードの一つである「agent」は、「行為主体」、「仲介者」、「代理人」など様々な意味をもつ語である。本稿ではこの語をそれぞれ文脈に応じて訳し分けたが、「行為主体」と「仲介者」の両方の意味で使われていると考えられるところでは、カタカナの「エージェント」を用いた。

(ii) 訳注2 「エスタード・ダ・インディア Estado da Índia」とは、本文中でも述べられているようにきわめて包括的な意味をもつ用語であり、その地理的な範囲も、必ずしも現在のインド亜大陸には限られていない。そのため本稿では、「ポルトガル領インド」ではなく、「ポルトガル領インディア」の訳語を用いた。また、とくに統治機構に言及していると思われる場合は、「ポルトガル領インディア政府」とした。なお、地理的な名称として「India」の語のみが使われている場合も同様の理由で、明らかにインド亜大陸を指している場合を除き、「インド」ではなく「インディア」の訳語を用いた。

(iii) 訳注3 ポルトガル語の langar に由来する言葉で、「投げ出された(人々)」といった意味。

(iv) 訳注4 原文では「dogicos」、あるいは「dojucius」。「同宿」とは司祭や修道士の宣教を手伝った日本人信徒のこと。

注

- (1) Andre Gunder FRANK, *ReORIENT. Global Economy in the Asian Age*, Berkeley: University of California Press, 1998.
- (2) Sanjay SUBRAHMANYAM ed., *Merchants, Markets and the State in Early Modern India*, Delhi: Oxford University Press, 1990, *Merchant Networks in the Early Modern World* (Series: An Expanding World, Vol. 8), Aldershot: Variorum Books, 1996, *Institutions and Economic Change in South Asia*, Delhi: Oxford University Press, 1996, *Land, Politics and Trade in South Asia*, Delhi: Oxford University Press, 2004, [驢鞍子と羊の群衆] 著者によつて「イト」の文献が「イ」° *Improvising Empire. Portuguese Trade and Settlement in the Bay of Bengal, 1500-1700*, Delhi: Oxford University Press, 1990, (Revised Portuguese translation: *Comércio e Conflito: A Presença Portu-*

- guesa no Golfo de Bengala, 1500-1700*. Lisboa: Edições 70, 1994). *The Portuguese Empire in Asia, 1500-1700: A Political and Economic History*. London: New York: Longman, 1993 (Portuguese translation: *O Império Asiático Português, 1500-1700. Uma História Política e Económica*. Lisboa, DIFEL, 1996).
- (3) M.N. PEARSON, *Merchants and Rulers in Gujarat: The Response to the Portuguese in the Sixteenth Century*. Berkeley: University of California Press, 1976. *Port Cities and Intruders: The Swahili Coast, India, and Portugal in the Early Modern Era*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 1998. *The World of the Indian Ocean, 1500 -1800: Studies in Economic, Social, and Cultural History*. Burlington, VT: Ashgate, 2005
- (4) James C. BOYAJIAN, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2008.
- (5) ハビダ' ナムベダチャールズ・ボナサーのポルトガル帝国に関する [次
の4ページ] 翻譯を關連文庫 (Charles BOXER, *The Portuguese Seaborne
Empire. 1415-1825*. London: Hutchinson, 1969: *Portuguese Conquest and
Commerce in Southern Asia, 1500-1750*. London: Variorum Reprints, 1985;
Portuguese Merchants and Missionaries in Feudal Japan, 1543-1640.
London : Variorum Reprints, 1986; *The Church Militant and Iberian
Expansion, 1440-1770*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1978)
& 'ベナーの解説 (J. H. Parry, *Trade & Dominion. The European Overseas
Empire in the Eighteenth Century*. London: Phoenix Press, 1971)' 'ハムハ・
エリホナムと親の者たち' ベグマン帝国に関する著作 (John H.
ELLIOTT, *España, Europa y el Mundo de Ultramar (1500-1800)*. Madrid:
Taurus, 2009; *Imperios del Mundo Atlantico. España y Gran Bretaña en
America (1492-1830)*. Madrid: Taurus, 2006; Henry KAMEN, *How Spain
Became a World Power. 1492-1763*. London: Penguin, 2002)' 'カスティー
ヤリと帝国に関する膨大な数の著作にめぐりあわすの経験やカス
(Lawrence JAMES, *The Rise and Fall of the British Empire*. London: Little,
Brown, and Co, 1994; T.O. LLOYD, *The British Empire 1558-1995*. Oxford:
New York: Oxford University Press, 1996).
- (6) ナムベダ' ハムベナートに "Building Informal Empires" in *The Pursuit of
Empire: The Dutch and Portuguese Colony of Brazil, 1621-1668. Workshop*
(Leiden University, 10-11 November 2011) 4頁-6°
- (7) Cátia ANTUNES; Amélia POLÓNIA, *Introduction to the Session: Beyond
Empires: Self Organizing Cross Imperial Networks vs Institutional Empires,
1500-1800*. Available at <http://www2.iisg.nl/esshc/programme>. [Accessed
at 02 February 2012].
- (8) Francesca TRIVELLATO, *The Familiarity of Strangers. The Sephardic
Diaspora, Livorno, and Cross-cultural Trade in the Early Modern Period*.
New Haven: London: Yale University Press, 2009.
- (9) Daviken STUDDICKI-GIZBERT, *A Nation upon the Ocean Sea: Portugal's
Atlantic Diaspora and the Crisis of the Spanish Empire, 1492-1640*. Oxford:
Oxford University Press, 2007.
- (10) Xabier LAMIKIZ, *Trade and Trust in the Eighteenth-century Atlantic
World. Spanish Merchants and their Overseas Networks*. s.l.: Royal Historical
Society/Boydell Press, 2010.
- (11) DynCoopNet, "Dynamic Complexity of Cooperation-Based Self-Organizing
Commercial Networks in the First Global Age", approved by TECT ("The
Evolution of Cooperation and Trading") - Program EUROCORES (European
Collaborative Research) - European Science Foundation (Ref. 06-TECT-FP-
004).
- (12) EUROCORES - TECT プロジェクト (欧州科学財団) に提出された Dyn
CoopNet 企画提案書からの抜粋°
- (13) *Idem*.
- (14) S. A. WEST, A. S. GRIFFIN; A. GARDNER, "Social Semantics: Altruism,
Cooperation, Mutualism, Strong Reciprocity and Group Selection". *Journal of
Evolutionary Biology* 20 (2), 2007, p. 416.
- (15) Paulo de JESUS; Lia TIRIBA, "Cooperação". in A. D. CATTANI; J. L.
LAVILLE; L. I. GAIGER; P. HESPANHA, eds., *Dicionário Internacional da
Outra Economia*. Coimbra: Almedina, 2009, p. 80.
- (16) Ana Sofia Vieira RIBEIRO, *Mechanisms and Criteria of Cooperation in
Trading Networks of the First Global Age: The Case Study of Simon Ruiz
Network, 1557-1606*. Porto, 2011 [Unpublished PhD thesis], pp. 10-14.
- (17) Robert AXELROD, *The Evolution of Cooperation*. New York: Basic Books,
1984, p. 6.
- (18) Luis Filipe THOMAZ, *De Ceuta a Timor*. Lisboa: Difel, 1994, pp. 44-102.
- (19) L. F. Reis THOMAZ, *De Ceuta a Timor*. Lisboa, Difel, 1994, p. 207.
- (20) Cf. Valdemar COUTINHO, *O Fim da Presença Portuguesa no Japão*. Lisboa:
Sociedade Histórica da Independência de Portugal, 1999.

- (12) 今の世界にどういふ「文明の文藝」を参照する。Glenn Joseph AMES, *The Estado da Índia: 1663-1677. Priorities and Strategies in Europe and the East*. Lisboa: [s.n.], 1989. *Renascent Empire: the House of Braganza and the Quest for Stability in Portuguese Monsoon Asia, c. 1640-1683*. Amsterdam: Amsterdam University Press, 2000. James C. BOYJIAN, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640*. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1993. Frank BROEZE, ed., *Brides of the Sea: Port Cities of Asia from the 16th-20th Centuries. Kensington*. New South Wales University Press, 1989. Om PRAKASH, *European Commercial Enterprise in Pre-Colonial India*. New York and Cambridge: Cambridge University Press, 1998. Om PRAKASH, Denys LOMBARD, eds., *Commerce and Culture in the Bay of Bengal, 1500-1800*. Delhi: Manohar, 1999. Catarina Madeira SANTOS, *Goa é a Chave de Toda a Índia. Perfil Político da Capital do Estado da Índia (1505-1570)*. Lisboa: CNCDP, 1999. Lúcio Manuel Rocha de SOUSA, *O Japão e os Portugueses (1580-1614). Religião, Política e Comércio*. Porto, 2007. 2 vols. [Unpublished PhD thesis]. Sanjay SUBRAHMANYAM, *O Império Asiático Português, 1500-1700. Uma História Política e Económica*. Lisboa: Difel, 1995. Luís Filipe Ferreira Reis THOMAZ, *De Ceuta a Timor*. Lisboa: Difel 1994. Ângela Barreto XAVIER, *A Invenção de Goa: Poder Imperial e Conversões Culturais nos Séculos XVI e XVII*. Lisboa: Imprensa de Ciências Sociais, 2007.
- (23) Francisco BETHENCOURT, "Configurações Políticas e Poderes Locais" in Francisco BETHENCOURT, Diogo Ramada CURTO, eds., *A Expansão Marítima Portuguesa, 1400-1800*. Lisboa: Edições 70, 2010, pp. 207-264; Isabel dos Guimarães SÁ, "Estruturas Eclesiásticas e Acção Religiosa" in Francisco BETHENCOURT, Diogo Ramada CURTO, eds., *A Expansão Marítima Portuguesa, 1400-1800*. Lisboa: Edições 70, 2010, pp. 265-292.
- (23) James BOYAJIAN, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2008, p. 32.
- (24) António Baião 白鳥 文夫, *A Inquisição de Goa. Tentativa de História da sua Origem, Evolução e Extinção*. I. Lisboa, 1949, pp. 17-18 以下は、手紙と参照する。
- (25) A. CUNHA, *A Inquisição no Estado da Índia: Origens (1539-1560)*. Lisboa: *Arquivos Nacionais-Torre do Tombo*, 1995, p. 26 以下を参照。
- (26) 3 December 1539 - Goa (T.T.C.C. I Parte, Mç. 66, doc. 47, fl. 15-16) A. CUNHA, *A Inquisição no Estado da Índia: Origens (1539-1560)*. Lisboa: *Arquivos Nacionais-Torre do Tombo*, 1995, p. 253 以下は、手紙と参照。
- (27) Amélia POLÓNIA, "Mulheres que Partem e Mulheres que Ficam: O Protagonismo Feminino na Expansão Ultramarina". *O Estado da História*, n.º 4 (2001), pp. 79-98. フォン・コウ教のフェルディナントが、一五三二年末葉の国王への手紙の中で、多くの女性が、指揮官自身の承認と同意のもとで国王の船に乗せられていくことを認識して、自ら述べづる。「もつて船長たちが、彼らが高邁な仕事と信仰のために要求されていく戦争と場所の問題として、彼らが「実際に」行なっているように、彼らの船やガレオン船へと独身の女性を連れ込むことをしなければ、それは陸上のお役に立っている」。[船長たちが]彼女らにかかきつるよりも「むしろ、彼女ら自身で、その船が失われた原因なのではない」。Cf. A. da Silva REGO, ed., *Documentação para a História das Missões do Padroado Português do Oriente: Índia*. Lisboa: Agência Geral das Colónias, 1949, Vol. II, Carta de Goa, 1532. 同問題に關するハインリッヒ・ギンツのキリスト教として「文明」を「見よ」 Gaspar CORREIA, *Lendas da Índia*. Lisboa: Academia Real das Ciências, 1858-1864, vol. II, p. 819/821.
- (28) Letter from P. Sebastião Gonçalves, Carta de Goa, 10. Setembro, 1562 in Joseph WICKI, *Documenta Indica*. Romae: Monumenta Historica Societatis Iesu, 1948-[1988], vol. 5, pp. 525-534.
- (29) Letter from P. João Baptista da Ribeira, in Joseph WICKI, *Documenta Indica*. Romae: Monumenta Historica Societatis Iesu, 1948-[1988], vol. 6, pp. 537.
- (30) Anthony R. DISNEY, *Twilight of the Pepper Empire: Portuguese Trade in Southwest India in the Early Seventeenth Century*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1978, p. 21; James, BOYAJIAN, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2008, p. 33.
- (31) フェルナン・メンデス・ピント (一五〇九—一五八三) は、一五三七年三月十一日にポルトガルからインドに向けて出航した。『遍歴記』の中の彼自身の証言によれば、メンデス・ピントは難破して捕えられ、十六回から十七回も奴隷として売られたという。彼の記録の正確さは幾分疑わしく、現実に起ったことは、しばしば彼の伝記中の幻想的で英雄的な叙述とない交ぜになっている。彼は一五三九年にマカオに到着し、その城塞の隊長のために、スマトラとマラヤの王国への使者として働いた。彼はそれから

- マレー半島東側のパタニへ行き、バンコクのタイ人と貿易をして、盛んに商売を始めたのだった。海賊に身ぐるみをはがされると、彼とそのパートナーは、彼ら自身が海賊となることで復讐をした。彼はそれからインドシナ沿岸で貿易をした。中国沿岸で難破をし、万里の長城で働くための奴隷として売られた。彼はビルマ・タイ間の戦争に巻き込まれ、ビルマの政治と歴史について、ヨーロッパ人による最初の記録を著した。メンデス・ピントはタイから日本への二度目の旅行をし、鹿児島島の港に上陸した。[その地を] 出発するに際して、彼は日本人密航者を連れ帰り、マラッカにいた聖フランシスコ・ザビエルに引き渡した。それにより、ザビエルの日本への旅と、住民をキリスト教化しようとする努力を触発したのであった。このアジアにおける数年のうちのいくつかの時点で、メンデス・ピントは多くの財産を蓄えた。一五五一年に日本への三度目の航海を行なった時には、彼は裕福な商人となっていた。そこでフランシスコ・ザビエルは、日本の南部の封建領主の宮廷の一つに身を置いた。彼はザビエルに、日本における最初のキリスト教会を建てる資金を与えたのだった。Cf. <http://www.bookrags.com/biography/fernao-mendes-pinto/>, "PINTO, Fernão Mendes" in *Dicionário da Expansão Portuguesa*. Lisboa: Circulo de Leitores, 1994, vol. 2, pp. 904-906 and António Fernando ALMEIDA, *Fernão Mendes Pinto, um Aventureiro Português no Extremo Oriente: Contribuição para o Estudo da sua Vida e Obra*. Almada, Câmara Municipal de Almada, 2006.
- (32) マルコ・サンヤ *サンヤ SUBRAHMANYAM, O Império Asiático Português, 1500-1700: Uma História Política e Económica*. Lisboa: DIFEL, 1996, p. 205.
- (33) Charles CORN, *The Scents of Eden. A History of the Spice Trade*. New York: Tokyo, London: Kodansha International, 1997, p. 203. 香料の道.
- (34) Charles CORN, *The Scents of Eden. A History of the Spice Trade*. New York: Tokyo, London: Kodansha International, 1997, p. 203.
- (35) Susana Munch MIRANDA, "Élites Urbanas, Guerra y Presión Fiscal: El Financiamiento Extraordinario del Estado na Índia durante la Unión" in CIUITAS, *Ciudades i Ciudadanía en la Europa Moderna. V Curso de Historia Urbana* (Santander, 12/15 Septiembre 2011), and *A Administração da Fazenda Real no Estado da Índia (1517-1640)*. Lisboa, 2007. [Unpublished PhD thesis]
- (36) James BOYAJIAN, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2008, p. 29.
- (37) Vitorino Magalhães GODINHO, *Os Descobrimentos e a Economia Mundial*. Lisboa, Presença, [1987], vol. 3, pp. 43-80.
- (38) L. F. R. THOMAZ, "Portuguese Control over the Arabian Sea and the Bay of Bengal: A Comparative Study" in Om PRAKASH: Denys LOMBARD, eds., *Commerce and Culture in the Bay of Bengal, 1500-1800*. New Delhi: Manohar: Indian Council of Historical Research, 1999, pp. 115-165.
- (39) Amélia POLÓNIA, *Expansão e Descobrimentos numa Perspectiva Local. O Porto de Vila do Conde no Século XVI*. Lisboa, INCM, 2007, vol. 1, pp. 285-495, vol. 2, pp. 269-275; Amélia POLÓNIA, "Evangeliização e Comércio. A Figura do Eclesiástico Mercador" in *Estudos em Homenagem a João Francisco Marques*. Porto: FLUP, 2001, vol. 2, pp. 297-310.
- (40) Anthony R. DISNEY, *Twilight of the Pepper Empire: Portuguese Trade in Southwest India in the Early Seventeenth Century*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1978. *The Portuguese in India and Other Studies, 1500-1700*. Farnham: Ashgate, 2009.
- (41) James C. BOYAJIAN, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1993.
- (42) A. J. R. RUSSELL-WOOD, *A World on the Move: The Portuguese in Africa, Asia, and America, 1415-1808*. New York: St. Martin's Press, 1993, p. 32.
- (43) マルコ・サンヤ *サンヤ SUBHRAMANYAN, O Império Asiático Português, 1500-1700: Uma História Política e Económica*. Lisboa, DIFEL, 1996, pp. 141-149; León BOURDON, *Les Routes des Marchands Portugais entre China et Japon au Milieu du XVI^e Siècle*. Lisboa: Gráfica Lisbonense, 1949; John Ehlthney HALL, ed., *The Cambridge History of Japan. Vol. IV: Early Modern Japan*. Cambridge: Cambridge University Press, [2003], pp. 302-372; João Paulo Oliveira e COSTA, *A Descoberta da Civilização Japonesa pelos Portugueses*. [Lisboa]: Instituto Cultural de Macau/ Instituto de História de Além Mar, 1995, pp. 119-130.
- (44) Geoffrey PARKER, *The Military Revolution: Military Innovation and the Rise of the West, 1500-1800*. Cambridge: New York: Cambridge University Press, 1996, pp. 140, 210.
- (45) John Ehlthney HALL, ed., *The Cambridge History of Japan. Volume IV. Early Modern Japan*. Cambridge: Cambridge University Press, [2003], pp. 312-316.
- (46) João Paulo Oliveira e COSTA, *O Japão e o Cristianismo no Século XVI*.

- (9) Letter from Pedro Ramon to the General Priest Claudio Acquaviva, from Yqizucq, 15 October 1587 in *Archivum Romanum Societatis Iesu, Collection Japonica and Sinica*, 1011. Fls. 282v-285v. Quoted by Lúcio Manuel Rocha de SOUSA, *O Japão e os Portugueses (1580-1641). Religião, Política e Comércio*. Porto, 2007 [Unpublished PhD thesis], vol. 1, p. 85.
- (10) [リ]の歴史的 研究 について [ズトキ] 参照 [リ]の。 Lúcio Manuel Rocha de SOUSA, *O Japão e os Portugueses (1580-1641). Religião, Política e Comércio*. Porto, 2007 [Unpublished PhD thesis], vol. 1, pp. 77-104.
- (11) *Archivum Romanum Societatis Iesu, Collection Japonica and Sinica*, 2, fl. 165. Cit Lúcio Manuel Rocha de SOUSA, *O Japão e os Portugueses (1580-1641). Religião, Política e Comércio*. Porto, 2007 [Unpublished PhD thesis], vol. 1, p. 74.
- (12) Rui LOUREIRO, "Turning Japanese? The Experiences and Writings of a Portuguese Jesuit in the 16th. century Japan". in Dejanirah COUTO et François LACHAUD, dir., *Empires Eloignées*. Paris: École Française de l'Extrême Orient, 2010, pp. 155-168; João Paulo Oliveira e COSTA, *O Japão e o Cristianismo no Século XVI. Ensaio de História Luso-Nipônica*. Lisboa: Sociedade da Independência de Portugal, 1989.

参考文献一覧

- ALMEIDA, António Fernando, *Fernão Mendes Pinto, um Aventureiro Português no Extremo Oriente: Contribuição para o Estado da sua Vida e Obra*. Almada, Câmara Municipal de Almada, 2006.
- AMES, Glenn Joseph, *Renascent Empire: The House of Braganza and the Quest for Stability in Portuguese Monsoon Asia, c. 1640-1683*. Amsterdam: Amsterdam University Press, 2000.
- AMES, Glenn Joseph, *The Estado da Índia: 1663-1677. Priorities and Strategies in Europe and the East*. Lisboa: [s.n.], 1989.
- ANTUNES, Cátia; POLÓNIA, Amélia, *Introduction to the Session: Beyond Empires: Self Organizing Cross Imperial Networks vs Institutional Empires, 1500-1800 I Mechanisms and Processes*. Available at <http://www2.iisg.nl/esshc/programme>. Accessed at 02. February 2012.
- AXELROD, Robert, *The Evolution of Cooperation*. New York: Basic Books, 1984.
- 松田裕之 記『いかに科学——ベクトリーから国総論まで』(『新ネット

書房 一九九八年)]

- BETHENCOURT, Francisco, "Configurações Políticas e Poderes Locais" in BETHENCOURT, Francisco; CURTO, Diogo Ramada, eds. - *A Expansão Marítima Portuguesa, 1400-1800*. Lisboa: Edições 70, 2010.
- BOURDON, Léon, *Les Routes des Marchands Portugais entre China et Japon au Milieu du XVIe Siècle*. Lisboa: Gráfica Lisbonense, 1949.
- BOURDON, Léon, *La Compagnie de Jesus et le Japon. 1547-1570*. Paris: FCG - CCP, CNCDP, 1993.
- BOXER, Charles, *Portuguese Merchants and Missionaries in Feudal Japan, 1543-1640*. London: Variorum Reprints, 1986.
- BOXER, Charles, *The Church Militant and Iberian Expansion, 1440-1770*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1978.
- BOXER, Charles, *Portuguese Conquest and Commerce in Southern Asia, 1500-1750*. London: Variorum Reprints, 1985.
- BOXER, Charles, *The Portuguese Seaborne Empire. 1415-1825*. London: Hutchinson, 1969.
- BOYAJIAN, James, *Portuguese Trade in Asia under the Habsburgs, 1580-1640*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2008.
- BROEZE, Frank, ed., *Brides of the Sea: Port Cities of Asia from the 16th-20th Centuries*. Kensington: New South Wales University Press, 1989.
- CHANG, T'ien Tse, *Sino-Portuguese Trade from 1514 to 1644. A Synthesis of Portuguese and Chinese Sources*. Leyden, Brill, 1934.
- COOPER, Michael, "The Mechanisms of the Macau-Nagasaki Silk Trade" in *Monumenta Nipponica*. Tokyo: University of Sophia, 1972, vol. XXVII, n. 4.
- CORN, Charles, *The Scents of Eden. A History of the Spice Trade*. New York: Tokyo, London: Kodansha International, 1997.
- COSTA, João Paulo Oliveira e, *A Descoberta da Civilização Japonesa pelos Portugueses*, s.l.: Instituto Cultural de Macau/Instituto de História de Além Mar, 1995.
- COSTA, João Paulo Oliveira e, *O Japão e o Cristianismo no Século XVI. Ensaio de História Luso-Nipônica*. Lisboa: Sociedade da Independência de Portugal, 1989.
- COUTINHO, Valdemar, *O Fim da Presença Portuguesa no Japão*. Lisboa: Sociedade Histórica da Independência de Portugal, 1999.
- CUNHA, A., *A Inquisição no Estado da Índia: Origens (1539-1560)*. Lisboa: Arquivos Nacionais-Torre do Tombo, 1995.

- DISNEY, Anthony R., *The Portuguese in India and Other Studies, 1500-1700*. Farnham: Ashgate, 2009.
- DISNEY, Anthony R., *Twilight of the Pepper Empire: Portuguese Trade in Southwest India in the Early Seventeenth Century*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1978.
- ELLIOTT, John H., *Imperios del Mundo Atlántico. España y Gran Bretaña en América (1492-1830)*. Madrid: Taurus, 2006.
- ELLIOTT, John H., *España, Europa y el Mundo de Ultramar (1500-1800)*. Madrid: Taurus, 2009.
- FRANK, Andre Gunder, *ReORIENT. Global Economy in the Asian Age*. Berkeley: University of California Press, 1998. [「リトニョハム——トニョハム」の「リトニョハム」] (藤原書店 11000円)
- GODINHO, Vitorino Magalhães, *Os Descobrimentos e a Economia Mundial*. Lisboa, Presença, 1981-1983.
- HALL, John Ehitney, ed., *The Cambridge History of Japan*. Vol. IV: *Early Modern Japan*. Cambridge: Cambridge University Press, [2003].
- JAMES, Lawrence, *The Rise and Fall of the British Empire*. London: Little, Brown, and Co., 1994.
- JESUS, Paulo de; TIRIBA, Lia, "Cooperação", in A. D. CATTANI, J. L. LAVILLE, L. I. GAIGER, P. HESPANHA, eds., *Dicionário Internacional da Outra Economia*. Coimbra: Alameda, 2009.
- KAMEN, Henry, *How Spain became a World Power, 1492-1763*. London: Penguin, 2002.
- LAMIKIZ, Xabier, *Trade and Trust in the Eighteenth-century Atlantic World. Spanish Merchants and their Overseas Networks*. s.l.: Royal Historical Society/ Boydell Press, 2010.
- LLOYD, T. O., *The British Empire 1558-1995*. Oxford: New York: Oxford University Press, 1996.
- LÓPEZ-GAY, Jesús, "Métodos Misioneros en el Japón del Siglo XVII", in *A Companhia de Jesus e a Missão no Oriente: Actas do Colóquio Internacional*. Lisboa: Brotéria/Fundação Oriente, 2000, pp. 103-116.
- LOUREIRO, Rui, "Turning Japanese? The Experiences and Writings of a Portuguese Jesuit in the 16th Century Japan". In COUTO, Dejanirah et LACHAUD, François, dir., *Empires Eloignées*. Paris: École Française de l'Extrême Orient, 2010, pp. 155-168.
- MIRANDA, Susana Munch, *A Administração da Fazenda Real no Estado da Índia (1517-1640)*. Lisboa, 2007. [Unpublished PhD thesis]
- MIRANDA, Susana Munch, "Élites Urbanas, Guerra y Presión Fiscal: el Financiamiento Extraordinario del Estado na Índia durante la Unión" in *CIUTAS. Ciudades i Ciudadanía en la Europa Moderna. V Curso de Historia Urbana* (Santander: 12/15 Septiembre 2011).
- PARKER, Geoffrey, *The Military Revolution: Military Innovation and the Rise of the West, 1500-1800*. Cambridge: New York: Cambridge University Press, 1996. [「大元帥」] 『大元帥の戦術』——「ローマ」の戦術の発展 1400-1700年 [「大元帥」] (図文館 1700円)
- PARRY, J. H., *Trade & Dominion. The European Overseas Empire in the Eighteenth Century*. London: Phoenix Press, 1971.
- PEARSON, M. N., *Merchants and Rulers in Gujarat: The Response to the Portuguese in the Sixteenth Century*. Berkeley: University of California Press, 1976. [「田園」] 『田園の発展』——「田園」の発展の歴史 (図文館 1700円)
- PEARSON, M. N., *Port Cities and Intruders: The Swahili Coast, India, and Portugal in the Early Modern Era*. Baltimore, MD: Johns Hopkins University Press, 1998.
- PEARSON, M. N., *The World of the Indian Ocean, 1500-1800: Studies in Economic, Social, and Cultural History*. Burlington, VT: Ashgate, 2005.
- POLÓNIA, Amélia, "Evangeliização e Comércio. A Figura do Eclesiástico Mercador" in *Estudos em Homenagem a João Francisco Marques*. Porto: FLUP, 2001, vol. 2, pp. 297-310.
- POLÓNIA, Amélia, *Descobrimentos numa Perspectiva Local. O Porto de Vila do Conde no Século XVI*. Lisboa, INCM, 2007, vol. 1, pp. 285-495, vol. 2, pp. 269-275.
- POLÓNIA, Amélia, "Mulheres que Partem e Mulheres que Ficam: O Prototipo Feminino na Expansão Ultramarina". *O Estudo da História*, n.º 4 (2001), pp. 79-98.
- POLÓNIA, Amélia, "Women's Participation in Labour and Business in the European Maritime Societies in the Early Modern Period" in *La Famiglia nell'Economia Europea Sec. XIII-XVIII: The Economic Role of the Family in the European Economy from the 13th to the 18th Centuries*. Prato, Firenze University Press, 2009, pp. 705-720.

- POLÓNIA, Amélia, "Women's Contribution to Family, Economy and Social Range in Maritime Societies. Portugal 16th Century". *Portuguese Studies Review*, Vol. 13, No. 1, 2006, pp. 269-285.
- PRAKASH, Om, *European Commercial Enterprise in Pre-Colonial India*. New York and Cambridge: Cambridge University Press, 1998.
- PRAKASH, Om; LOMBARD, Denys, eds., *Commerce and Culture in the Bay of Bengal, 1500-1800*. Delhi: Manohar, 1999.
- RIBEIRO, Ana Sofia Vieira, *Mechanisms and Criteria of Cooperation in Trading Networks of the First Global Age. The Case Study of Simon Ruiz Network, 1557-1597*. Porto, 2011 [Unpublished PhD thesis].
- RUSSELL-WOOD, A. J. R., *A World on the Move: the Portuguese in Africa, Asia, and America, 1415-1808*. New York: St. Martin's Press, 1993.
- SÁ, Isabel dos Guimarães, Estruturas Eclesiásticas e Acção Religiosa in BETHENCOURT, Francisco; CURTO, Diogo Ramada, eds., *A Expansão Marítima Portuguesa, 1400-1800*. Lisboa: edições 70, 2010, pp. 265-292.
- SANTOS, Catarina Madeira, *Goa é a Chave de Toda a Índia. Perfil Político da Capital do Estado da Índia (1505-1570)*. Lisboa: CNCDF, 1999.
- SOUZA, Lúcio Manuel Rocha de, *O Japão e os Portugueses (1580-1641). Religião, Política e Comércio*. Porto, 2007 [Unpublished PhD thesis], 2 vols.
- SOUZA, Teotónio R. de, "Gonçalo Martins: a Jesuit Procurator, Businessman and Diplomat in the Estado da Índia", *Mare Liberum*, 5 (1993), pp. 119-128.
- STUDNICKI-GIZBERT, Daviken, *A Nation upon the Ocean Sea: Portugal's Atlantic Diaspora and the Crisis of the Spanish Empire, 1492-1640*. Oxford: Oxford University Press, 2007.
- SUBRAHMANYAM, Sanjay, *Improvising Empire: Portuguese Trade and Settlement in the Bay of Bengal, 1500-1700*. Delhi: Oxford University Press, 1990.
- SUBRAHMANYAM, Sanjay, *Comércio e Conflito: A Presença Portuguesa no Golfo de Bengala, 1500-1700*. Lisboa: Edições 70, 1994.
- SUBRAHMANYAM, Sanjay, *The Portuguese Empire in Asia, 1500-1700: A Political and Economic History*. London: New York: Longman, 1993.
- SUBRAHMANYAM, Sanjay, *O Império Asiático Português, 1500-1700: Uma História Política e Económica*. Lisboa: DIFEL Editora, 1996.
- SUBRAHMANYAM, Sanjay, ed., *Land, Politics and Trade in South Asia*. Delhi: Oxford University Press, 2004.
- SUBRAHMANYAM, Sanjay, ed., *Merchant Networks in the Early Modern World* (Series: An Expanding World, Vol. 8). Aldershot: Variorum Books, 1996.
- SUBRAHMANYAM, Sanjay, ed., *Institutions and Economic Change in South Asia*. Delhi: Oxford University Press, 1996.
- SUBRAHMANYAM, Sanjay, ed., *Merchants, Markets and the State in Early Modern India*. Delhi: Oxford University Press, 1990.
- THOMAZ, Luís Filipe Reis, "Portuguese Control over the Arabian Sea and the Bay of Bengal: A Comparative Study" in Om PRAKASH; Denys LOMBARD, eds., *Commerce and Culture in the Bay of Bengal, 1500-1800*. New Delhi: Manohar; Indian Council of Historical Research, 1999, pp. 115-165.
- THOMAZ, Luís Filipe Reis, *De Ceuta a Timor*. Lisboa: Difel, 1994.
- TRIVELLATO, Francesca, *The Familiarity of Strangers. The Sephardic Diaspora, Livorno, and Cross-cultural Trade in the Early Modern Period*. New Haven; London: Yale University Press, 2009. 「和栗珠里」 藤内哲也 飯田昌貴訳『異文化間交易ネットワーク——近世のセファルディム商人』（知泉書館 二〇一七年）
- WEST, S. A.; GRIFFIN, A. S.; GARDNER, A., "Social Semantics: Altruism, Cooperation, Mutualism, Strong Reciprocity and Group Selection", *Journal of Evolutionary Biology* 20 (2), 2007.
- XAVIER, Ângela Barreto, *A Invenção de Goa: Poder Imperial e Comersões Culturais nos Séculos XVI e XVII*. Lisboa: Imprensa de Ciências Sociais, 2007.

(本学文学部教授)